

---

# 疾風機兵アサルト・コア

† 李陽 †

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

疾風機兵アサルト・コア

### 【Nコード】

N7935U

### 【作者名】

十李陽十

### 【あらすじ】

茨城県つくば市に住む”大谷 和哉”、“光石 誠”、“杉咲 結衣”は、ゲームセンターに設置してあるゲーム筐体『疾風機兵アサルト・コア』に夢中になっていた。変形機体を作ることが出来ると気付いたカズヤは、三機分のパーツを投入して変形ロボを作り上げる。高速機動『ツクヨミ』、重火力『アマテラス』、汎用近接戦闘『スサノヲ』の三形態である。この機体に『三機神』と名付け、全天周囲モニタの筐体に取り込む。ゲーム開始を選ぶが【只今対戦者を受け付けています】の画面から中々変わらない。三人は、作戦

会議で時間を潰すことにした。十分程が経った頃、さすがに”おかしい”と思った三人が筐体から出ようとする。扉が開かない。仕方なくシートに座ると、画面に【NOW LOADING】の文字が表示される。次の瞬間、三人は”意識”を切断され、気付くとそこは別の世界だった。

## 第1話 シャットダウン(前書き)

空想科学2011参加作品です。

## 第1話 シャットダウン

遠くで響く大きな音が、俺の腹筋を揺さぶる様に響く。音に遅れること数秒、大きな衝撃が、俺達を乗せた飛行機に叩きつけられた。だけど、この程度じゃ俺達は動じない、この程度で動じていたら、奴らと戦うことなんて出来やしないんだ。

作戦空域に近くなり、コクピットに乗り込んで、感触を確かめるように手元のデバイスをイジる。指先が鈍るような感触を振り払うかのように、指の筋を伸ばす。狭いコクピットの中では碌にストレスチも出来ない。

俺達がこれから降り立つのは、明らかな殺意を向けてくる敵が存在する戦場だ。火薬と血と肉が焼ける匂いが充満する地獄だ。

既に何度か戦闘は行った。シミュレーションに関しては、気が遠くなる程こなしている。それでも、出撃前の緊張に慣れることはない。

機体に付けられたスピーカーから、雑音を伴って、上官から作戦を告げる言葉が流れた。

「敵の数は一四。ジェネラル汎用万能型隊長機が一、汎用近距離特化型が八、イエーガー重装甲高火力支援型が五だ。その内、アタッカーに二機、イエーガーに一機、新型が投入されている。気を付ける。作戦は一四ひとよんまるま時より行われる。機体の射出は今より四秒後。各員の戦果に期待する」

俺は、上官からの報告に声を荒げる。

「新型が三機!? 聞いてないですよ!!!」  
「事実だ。受け止める。そして対応しろ」

シートを殴りつけ、目を閉じて、苛立ちをぶちまける。それでもしないと、今の不安を抑える術を、俺は他に持ってないからだ。雑音を伴って、スピーカが新たな声を拾う。

「大丈夫だつて！ オレ達は誰も死なない！！ そして死なせない！ 絶対だ！」

「そうよ！ たかが新型くらいで、男がガタガタ騒がないの！ それに守ってくれるんでしょ？ 和哉！」

俺はゆっくりと目を開ける。さっきまでの不安も苛立ちも全て、キレイに洗い流されたようだった。代わりに、俺の中で確かに灯る勇気の熱を感じた。

「ああ！ 守る！ 結衣も誠も、絶対に死なせない！ 絶対に帰るんだ！ 元の世界へ！」

ミッションスタート  
作戦開始、機体の射出を行います。 各員の健闘を祈ります。

飛行機に付けられたAIが出撃を告げる。  
俺が操る機体<三機神>のAIが、俺を鼓舞するように声を掛け  
てきた。

『マスター行け！』

『マスターには私達が付いてます！』

機体の武器管制制御の補助や、細かい機体の動きを調整する、この機体の守護神である。

「ああ！ 頼りにしてるよ<イザナギ>！ <イザナミ>！ 大沢  
和哉<三機神>！ 発進する！」

俺の相棒、＜三機神＞がリアカタパルトへ進むと、赤い『RE  
ADY』のランプから、緑の『GO』のランプに切り替わる。慣性  
リムバ・デバイス除去装置が設置された機体の中でも、全ての慣性をゼロに出来る訳  
ではない。意識だけが空に飛び出して行くような感覚を味わいなが  
ら、俺を乗せた＜三機神＞が大空へと飛び出した。

上空から戦場を見下ろし、俺は”あの日”から今までのことを思  
い出していた。

ここは茨城県つくば市にある茨城県立竹英高等学校だ。ついさつ  
き、一五時二 分をもって、本日の授業及びホームルームに到るま  
でのルーチンが終了した。ちなみに今日は掃除当番じゃなかったか  
ら、すぐに”あそこ”に迎える。

俺は、カバンを掴むと挨拶もそこそこに教室を飛び出す。途中、  
下級生の女の子に衝突しそうになりながらも、なんとか回避して階  
段を駆け降りる。学校の昇降口に集まっていた友人達からの挨拶に、  
軽口を返しながら急いで自転車置き場に向かった。

自転車置き場には、既に幼馴染の二人が到着して、俺のことを待  
っていたようだ。

「和哉遅い！ 誠と先に行っちゃうところだったんだからね！」

「ゴメン！ ってか、教室の配置上仕方ないだろ！？ 俺の教室は  
三階の一番奥で、結衣と誠は二階の一番手前なんだから！」

「ククク、和哉。男の言い訳は見苦しいぜ？」

この二人は、俺の幼稚園時代からの幼馴染で、『すけとみ杉咲 ゆい結衣』と『

光石<sup>みつしいし</sup> 誠<sup>まこと</sup>。どっちも俺と同年の一五歳だ。

結衣は、元々黒い髪を少し明るい茶色に染めていて、長さは背中  
の肩甲骨の真ん中くらい。背はオレの目線より少し下に頭がくるか  
ら、一六センチってとこだと思う。あ、俺は一七五センチね。中  
学の時はそうでもなかったんだけど、高校に入ってから妙にモテだ  
して、同じ学年の奴らから何人も告白されてる。ずっと一緒にいる  
から、俺にはよく分らないんだけど、友達には猫が人間になった  
みたいに可愛いとか、少し胸は少ないけどスタイル良いし顔もモデ  
ルみたいとか言う奴もいる。たぶん、高校入ったばかりの頃に、三  
人で一緒に都内まで遊びに行ったことがあって、その時『読者モデ  
ルになりませんか？』と声を掛けられた。街頭スナップとかいうと  
ころに結衣の写真が一枚載ったことがあるんだけど、それ以来、急  
にそういう輩<sup>やから</sup>が増えた気がする。結局のところ、どいつもこいつも  
ミーハーなのだ。『雑誌に載ったことがある彼女を連れている』そ  
んなステータスが欲しい奴とか、『雑誌に載ってるのを見て恋に落  
ちた』なんていうミーハー以外の何物でもない同じ中学の同級生と  
か、馬鹿ばかりだ。

そんなに煽てられても結衣本人は『え？そんなのどうだって良い  
じゃん。私はよく知らない人と付き合うなんて有り得ないし。私の  
何を知ってるっていうのよね！？ 冗談じゃないわ！』と一蹴して  
しまふ辺り、コイツ良い性格してると思う。その代わり、一部の女  
の子からは『お高く止まつてる』とウケが良くないらしくて陰湿な  
イジメに合うこともあるらしいけど、『そんなことで凹んだり、凹た  
れたり、凹まされたりなんてしない！ 文句があるなら直に来なさ  
いよ！ 相手になってあげるから！』と一人で全て解決してしまっ  
た。なんともパワフルな奴だ。ちなみにそれ以来、女子からも告白  
されるようになったというのが最近、結衣を悩ませる種だ。

誠も、中学の時までは全然モテるなんてことは無かった。背は一  
ハ一センチと高いけど、むしろ教室に一人は居るくらいの人らしく  
て、サブカルチャーが大好きな、あまり喋らないような日陰が似合



う男だった。でも、高校に入っすぐの頃、三人で都内に遊びに行った時だ。誠は、学校に居る時はコンタクトを付けずに眼鏡で登校している。人の事は言えないけど、髪の毛も寝癖を取っただけのシンプルヘアだ。しかし、三人で遊ぶ時だけは遠出もするし、しかも都内で遊ぶとなれば多少気を使うのが高校生という物だ。バッチリ、コンタクトに変えて、髪型も毛先をファイバー系ワックスで遊ばせている。服装も、学校のブレザーとは違って、スラっとした体型を上手く生かしたファッションで、殆どモノトーンで決めている。左耳にはピアスまで付けているから、学校の雰囲気とはまるで違った人になっていた。

結衣の読者モデル話の時に、同じカメラマンの人が『彼氏？　カッコイイね！　一緒に撮らせて貰える？』と聞かれ『さすがにバレることも無いか』と軽く考えた誠は、俺も含めて三人で一緒に写ったのだが、学校で『この一緒に写ってる人、誰！？　彼氏！？』と問われた結衣が、『違う違う。有り得ない。だって、それ誠だし……あ……』口から出た言葉を、もし元に戻せたらどんなに幸せだろうか、結衣はその時始めて心の底から思ったらしい。画して、誠が実はイケメンだったという事実が一日の内に校内へ広まり、しばらくの間”見学”の為、廊下に人が集まる様になった。もちろん、結衣には後で誠から容赦ない説教がされたことは、俺の中では良い思い出になりつつある。

「マジうるせー！　ってか早くいこう！　ついに今日、俺の”アレ”が完成するんだからさ！」

「そうだったな。構想から一カ月かあゝ結構掛かったよな」

「今日でくタクミカズチ>ともお別れなんだね。なんだか寂しい気もするけど！」

俺達三人は、自転車に跨ると、勢い良く漕ぎ出して”あそこ”への道を急ぐ。俺が通う学校は、田園地帯にあるんだけど、水害とか

を懸念してるのか、関東平野といえど、少しくらいは存在する高台に学校は建てられていた。登校の時は、永遠に続くと思えるような微妙にキツイ上り坂だ。逆に”あそこ”までの道程は、下り道ってことなんだけどね。

坂道を下るスピードに、自分達で加速を加えて、更にスピードを上げていく。見通しの良い道だから、車も飛ばして走ることが多い道だけど、その分、スピードを出していても危険が事前に察知出来るから、いつもこの道は三人とも自転車の限界に挑戦するようなスピードを出す。もちろん少しでも早く”あそこ”に辿り着く為だ。

”あそこ”の”アレ”は今凄く人気があるから、早くしないと順番待ちで一時間以上並ぶことになるんだ。

坂道を下りきってスピードが落ち始めた頃、誠が思いだしたように話し始めた。

「しっかしよ。和哉、良く”あんなこと”思い付いたよな。オレには、そこまで考えるの面倒臭くて無理だしよ」

「ホントよね。私なんてくブラックキャット>至上主義だから、他なんて思いつかないわ」

二人が感心したように、俺のことを誉める。なんだが、くすぐったくて人差し指で鼻先を掻きながら、俺は言った。

「だって、俺さあ授業中にそれしか考えて無いもん。」あのこと”だ”って、この前の中間テストの問題用紙の裏に、ビッシリと理論が書いてあるからね」

「それで、この間の古文のテスト結果が……」

「三四点……途中から『解答欄を一つずらして書いた』なんて、聞いたの小学校の時以来よ？」

俺は、ちよつと罰が悪そうに『あはは……』と尻すばみに笑うと、

一言『ゴメン』と謝った。なぜ、謝るのかと言うと、中間テストの一週間前から二人には、テスト勉強を教えて貰っていたのだ。しかも、解答欄がずれていなければ七二点と、まあまあの点数だっただけに申し訳なさもひとしおだ。

「ま！　らしいっちゃ、らしいけどな！」

「そうね。和哉が七二点なんて、出来すぎよね！」

「二人とも酷いな！！　俺泣いちゃうよ！？」

そんな会話をしながら、向かった”あそこ”には自転車で一分程で到着した。

ここは<ゲームセンター・スイングワールド>という名前で、バツティングセンターとゲームセンターが一緒になってる店だ。最初は、俺と誠でバツティングセンターを中心に遊んでただけで、店に設置してあった、大きなパネルで宣伝しているゲームに俺達は、惹かれていったんだ。

<疾風機兵アサルト・コア>そのゲームのタイトル通り、よくあるロボット物の戦闘シュミレーションゲームだ。アニメとかで有名になったロボットを操縦するようなゲームはあったけど、このゲームは完全なオリジナルで、しかもロボットは細かい内部の部品までカスタマイズが可能、姿形や色に到るまで、全て自分の指定で作成することが出来る。しかも、こういうゲームに有りがちな、お金を持つてくる人が強くなる。という要素が極力無くなる様に配慮してある点が素晴らしかった。ゲームが好きな高校生なら誰もが持っているであろう、携帯ゲーム機各社全てに対応していて、無料でダウンロードして遊ぶことが出来る。お金が掛かるのはロボット本体の…ゲームの中では機体って言うんだけど、機体の整備をする時に一回、三　円が掛かるだけだ。整備って言っても、戦闘が終われば修理せずに回復しちゃうから、実質カスタマイズの時だけゲームセンターに来れば良いようになっている。

でも、このゲームの凄いところは、そういう部分だけじゃない。

機体の動作に関わるAI、武器管制に到るまでの制御プログラムなんかも、自分でカスタマイズ出来るんだ。と言っても、俺達のような高校生や、まして小中学生がプログラミングなんて無理だ。そこも上手く考えられていて、基本的な動作なんかについては、モジュール化された動作プログラムがパズルのピースみたいに視覚化されていて、それをパズルのように組み合わせるだけで、制御プログラムがカスタマイズ出来るようになってる。どうしても難しい人の為に、制御プログラムの初期化をすれば、スタンダードな動作の保障はシステムがやってくれるんだ。

そのカスタマイズ可能箇所は、武器にも到っているし、このゲームでカスタマイズ出来ない物は無いって言われてるくらいだった。

そして、このゲームのもう一つの売りは、全天周囲モニター式筐体だ。<sup>うたい</sup>普通のゲームって思い浮かべると、大きな液晶モニターと、丸い球が先端に付いたスティックが一本、ボタンが四つ〜八つあるイメージだと思う。だけど、このゲームは自分の座るシートの裏側まで、全てモニターに囲まれていて、足元も透明で分厚いアクリル板の下にもモニターが埋まっている程だ。コントロールパネルも、ゲームとは思えないような、スロットルレバーや、フットパネル、操縦桿、色々なボタン。まさにコクピットと言って良いスペックを持っていた。この筐体で遊ぶには、カスタマイズも含めて三万円が必要だ。一度、筐体で戦闘したら、携帯ゲームでは到底満足できないし、カスタマイズをする時に毎回、その臨場感を半強制的に味わわされるのだ。メーカーも上手く考えている。

そんなゲームに俺と誠が嵌まるのは時間の問題だった。俺も誠もロボット好きなんだ。特に宇宙を舞台にしたロボットアニメ、生まれる前からあるシリーズに、心酔していた俺達は、二〇一〇年に降に放映された新シリーズで、戦闘中に未完成だったロボットの動作プログラムのパラメータを操作して、まともに動けなかったロボットを動かせるようにしただけでなく、敵のロボットを撃退してしま

うという、ご都合主義にも取れるが、ロボット好きには堪らないカッコ良さを見せられていた為、『プログラム「カッコイイ」』という偏った興味を持っていたのが拍車を掛けていた。

俺達二人と一緒に遊ぶ時は、もちろん幼馴染の結衣も……ということになる。この結衣という女の子は、まさにその二人が嵌まっているロボットアニメの新シリーズで出て来た男性キャラクター達が『どストライク』だったらしく、『学校で人気の女の子』も裏を返して見てみれば、腐女子の世界に片足を浸した状態だ。それが発覚して以来、あくまで俺の感覚だけど、誠と話している時に、少し怪しい視線で俺達を見ている気がしてならない事を付け加えておく。

俺達三人は、自転車を駐輪場に止めると、走って筐体の所に向かう。すでに筐体のところには、結構な人数の列が出来ていた。スーツ姿の人とか、真面目に仕事行けとか思う。俺達は仕方が無いのでS A N Y製の携帯ゲーム機で「疾風機兵アサルト・コア」を起動すると、店内で対戦相手を探した。これだけの人数が、筐体の順番待ちをしているのだから、おそらく同じように待っている間の暇つぶしで相手を探している筈だ。俺達の思惑通り、対戦相手がすぐ見つかった。相手は五人でチームを組んでいるようだ。こちらは三人だが、このゲームセンターでのチーム戦闘成績は勝率七割を超えている。調度良いハンデだろう。

このゲーム内で使用するお金はクレジットと呼ばれていて、携帯ゲーム内のストーリークエストを進めれば、クレジットを稼ぐことが出来る。しかし、このゲームでクレジットを大量に稼ぐのは、このオンラインバトルの時が一番である。というのは、オンラインバトルを開始する前に、お互いに賭けをするのだ、それでクレジットをお互いに同額賭け合うと、勝者には賭けたクレジットに応じたパーツとボーナスクレジットが付与されるのだ。もちろん、負けた方は賭けたクレジットを失い。その代わりに、オマケ程度の消耗品を一つプレゼントされるという仕組みだ。この性質上、ゲームを二つ購入して、稼ごうとする人が発生しそうだが、そこはゲームのセキ

ユリティで上手く出来ている。ゲーム機には一つずつ固有の証明番号が付与されていて、同一証明番号の相手との戦闘成績が一方的に偏ると、片方だけのレートが増えていくようになっていいるのだ。そして、ボーナスの付与が行われない。その為、社会人が携帯ゲームを二つ以上用意して、自分一人で片方のゲーム機内のクレジットを貯めるという行為を実質禁止しているのだ。

俺達三人は、相手が五人で二人多いという状況を逆手に取り、賭け金のつり上げを狙う。こちらから一旦、このゲームセンター内で暗黙の了解となっている平均賭けクレジットより、一桁多い数字を賭けた。さも、間違つて賭けたように……すると、直ぐに相手がそれに対して乗つて来た。五対三である。勝てると見込んだのだろう。こちらが同様の状況でも、これならキャンセルする暇も与えずに、戦闘を開始していただろう。

こちらの戦力は、俺の機体が『汎用近距離特化型：<タケミカヅチ>』、誠が『重装甲高火力支援型：<ラグナロク>』、結衣が『高機動近接特化型：<ブラックキャット>』だ。

相手の戦力は、見た目から推測するに、盾を持たない小型の機体、高機動近接特化型が三人、両肩に付けた大きな装甲板と背中に背負った明らかに高火力の武器、重装甲局地防衛型か特殊仕様の重装甲高火力支援型が二人つとこだ。

相手もゲーム慣れした連中の様だ。ゲーム初心者に有り勝ちな、万能こそ最強という考えを一切排除した機体メイキング。はつきり言つて布陣に隙を感じさせない。だけど、俺達の機体は、俺の思想が少なからず反映された特殊仕様機体だ。ただの玄人じゃ相手にはならない。

対戦者が決着方法の指定をしてきた『完全決着方式』か、確かにトルーパーによる遊撃と、ガーディアンによる援護と守り。自分達にとって、一番勝率が上がる方法を選択してきたのだろう。賢明な判断だけど、甘い。

「なあなあ、コレってオレ等には、かなり好都合じゃね？」

「俺も思った。マジでラッキーだわ」

「さっさと美味しく頂いちゃいましょうよ」

相手の『完全決着方式』の申請に対して『YES』と応える。すると、画面が暗転し、戦場となるマップ全体を表示した。

「今回は、『廃都』か……オレの出番は無さそうだな。俺は都庁の上から適当に狙撃してるから、二人で倒しといてよ」

「まあ、この隠れる場所の多いマップじゃ、しょうが無いな。ってか相手が気の毒過ぎる。戦力の半分がまともに使えないじゃん」

「私のくブラックキャットちゃん、じゃれ殺してあげるわ！」

画面の真ん中に『GET READY』の緑の文字が浮かび上がる。それと同時に俺達三人は、それぞれ戦闘前の癖が出てくる。誠は指の骨を鳴らし、結衣は手首の準備運動、俺は指先が鈍るような感触を振り払うかのように、指の筋を伸ばす。

画面の表示が赤文字の『GO!』の文字に切り替わると同時にデバイスの方向キーに力を込める。戦闘開始だ。

やっぱり全天周囲モニタに比べて、明らかに臨場感を感じさせない画面での戦闘。ゲームを作った会社も相当頑張った感じは画面からは伺える。最近流行りの3D対応で、そこそこの臨場感は味わえるように工夫がされているが、手元にある入力用デバイスがどうにもゲームという感覚を拭いきれない。

最初にコレで始まって、コレで終わるのなら何の文句も無く純粋に楽しんで遊べたのだろう。だけど、一度味わってしまった全天周囲モニターの臨場感、敵が迫るモーター音、近くに着弾する攻撃による衝撃と音、敵を切り裂く手応え、どんなにゲーム機の性能が上がっても、手元の小さな画面と、一個前後のボタンで制御されるゲームでは一生掛かっても勝つことは出来ない。それこそバーチャ

ルリアリティでも持ち込まないと無理だし、それほどの能力をたかが携帯ゲーム機に持ち込むのに何年かかるだろうか、その頃きつと俺は老人になっていてゲームなんて興味を無くしているんだろう。

そんなことを考えながら、片手間の戦闘を行っている、廃ビルの際間から相手のガーディアンから近距離攻撃を受けて、<タケミカズチ>の盾を持つ左腕が吹き飛んでしまった。

このゲームの凄いところは、部品一個一個に到るまで耐久力が設定されていることだ。さすがに一回の戦闘毎に機体の小さなパーツ一つ一つまでメンテナンスが必要な程のマゾゲーでは無いけど、一度の戦闘中に受けたダメージ量に応じて、機体の各部位が破壊されてしまう。戦闘中にカスタマイズ画面を開いて、整備をすることも出来るが、整備にかかる時間の間は敵からの攻撃に対して無防備になってしまう為、暗黙の了解的に戦闘中のカスタマイズ行為は愚の骨頂という共通認識が出来上がっていた。

俺は吹き飛ばされた左腕を残った右腕で拾い上げると、装着されていた円形の盾を外して、円盤投げのように俺を狙撃してきたガーディアンに投げつけた。投げつけると同時に俺のタケミカズチが一気に走り出す。ガーディアンが投げつけられた盾に驚いて、慌てて回避行動に移る。ここは『廃都』、障害物が多くて大型の後方支援機体じゃ動きが制限され回避方法は限定出来る。右横跳躍。俺は、先読みしていた回避先に回り込むと腰に携えた主兵装を抜き放つ。主兵装<アメノオハバリブレイド>である。ガーディアンの右肩に備え付けられたシールド諸共胴体を真っ二つに切り落した。

画面から顔を上げて誠にニヤリと笑いかける。遠くの方で『うお！ 一撃！？ ありえねえ！』などと声が上がっている。どうやら対戦相手は、その声の方にいそいだ。だけど、すぐに興味を無くして画面に視線を落とす。

横から結衣が声を掛けて来た。

「和哉被弾してるじゃない。何、油断してんのよバカ。私が一人で



しばらく相手にしてやるから、サッサと直して来なさい」

「まさか、ガーディアンがこんな近くまで来て攻撃するなんて思わなくてさ」確かに油断してたけど」

「言い訳は良いから、サッサと左腕直しなさいよ。別に和哉の為じやないわよ。私が残りの相手してる間、カスタマイズ画面の脇で私の戦いを指咥えて見てなさいよ！」

「はいはい」

俺は結衣の言いつけを守るため、マップの中でもとくに死角に成り易いところを探して、戦闘中にカスタマイズ画面を開く、先ほどの左腕の修理と装着を行った。時間にして九秒。思ったよりも時間がかりそうだ。

「結衣」九秒くれ」

「長っ！ そんなにあつたら、私だけで他の四人倒しちゃうわよ！？」

「お好きにどうぞ」

そんなやりとりをしていると、画面の奥、都庁の方で爆発が起きる。

「わりい結衣、トルーパーの一匹貰ったわ」

「こら！ 誠！ そいつら全部私の獲物なの！ 横取りしないで！」

「そんな言ってもよ」オレに仕掛けてきたんだから正当防衛だろ？」

「分かったわよ！ 誠、あんたは和哉の護衛してなさい！ 私が残りは殺るんだから！」

「お」怖っ！ ここは大人しく言われた通りにしておきますかね」

俺の機体の前に誠のラグナロクが仁王立ちする。俺の機体は廃ビ

ルに三方を囲まれたところに座り込んで、カスタマイズ中である。その開いた一か所に誠のラグナロクが立ちふさがって、俺の盾になるうという訳だ。

「誠サンキュ」

「おうよ」

俺は、カスタマイズ中の暇な時間を再度、味方プレイヤー視点に切り替えて結衣の戦闘風景を見ていることにした。

結衣は、残りトルーパー二機、ガーディアン一機目掛けて、高機動近接特化型特有のスピードを使って一気に駆け寄る。高機動近接特化型の特徴はその速さを生かした素早い移動と攻撃、攻撃回数にある。その代償として壊滅的なまでの薄っぺらい装甲が特徴だ。完全に<DEAD OR ALIVE>を地で行く仕様なのだ。そして、それは結衣の性格と絶妙にマッチしていた。

<ブラックキャット>は数が少なく、威力も申し訳程度にしかない中距離武器で敵のトルーパーを牽制すると、ガーディアンに急接近する。動きの鈍重なガーディアンはその豊富な防御力で攻撃に耐えきろうとするが、そこは俺が設計を手伝った機体だ。普通の機体とは比べ物にならない攻撃力を有している。一撃目の攻撃を防いだガーディアンは、きつと拍子抜けするほどの小さな攻撃力に驚いたことだろう。『なんだコレ、弱っ！』などと言っているに違いないだが、甘い。<ブラックキャット>の武器特性は加算だ。一撃目のダメージが二撃目に加算されるのだ。そして三撃目には二撃目。一撃目が一なら、二撃目が二、三撃目が三 という具合だ。既にガーディアンには一八回の攻撃が与えられている。豊富なスピードと、攻撃回数、そして近接における最強の攻撃力、それが俺と結衣で作り上げた<ブラックキャット>だ。

ガーディアンが爆発を伴ってフィールドから姿を消す。先ほど俺が倒したガーディアンと同じ方向から『くそっ！ 何回攻撃された

んだ！？　ありえないだろ！？」などと声が上がっていた。  
俺の機体の前で仁王立ちしていた誠の<ラグナロク>が少し動きを見せる。

「なあなあ、結衣。俺と和哉がいるところにさあ、トルーパーが二機来るんだけど、殺っちゃって良い？」

「ダメよ！　それは私の獲物なんだから！」

「でもさあ、もう目の前なんだよね。ってことで牽制兼ねて、一発行くから。攻撃範囲に結衣入ってるから避けるよ」

「え、ちょ、ちよつと待つ　！」

結衣が言いきる前に放たれる誠の<ラグナロク>の主兵装。両肩に備え付けられた長距離砲撃用武器<グングニール>が放つ極太の光線が『廃都』を挟りながら直進して行く。相手のトルーパーがその高機動性を生かして回避するが、もう一体のトルーパーは回避が間に合わず下半身を光に吞まれて消失させる。結衣は間一髪、回避に成功していた。

「一匹打ち漏らしたわ、結衣よろしく」

「あ・ん・たねえー！！！」

結衣がゲームの怒りを現実世界に顕現させようとした瞬間、俺のゲーム機が小気味良い音でカスタマイズ終了を告げた。

「あ、治った！　結衣、最後の俺が貰うよ」

「え？　ちよつと待って！　それは私の　！」

結衣が言葉を言いきる前に振るわれる<タケミカズチ>の<アメノオハバリブレイド>、敵のトルーパーを剣先の隅に捉えて一刀両断する。相手のトルーパーだった物が派手な爆音を上げて消失した。

画面上では、勝利した俺達の三機の機体が派手なアクションポーズを決めると空の彼方へと飛び去っていくCGが流れていた。俺のクレジット合計額に、俺の配当が配られる。結構な額になっていた。

「あんた達」

やばい。結衣がご立腹だ。主に誠の所為だと思うが、このままでは俺の身まで危ない。ここは幼馴染の力を見せてやるしかない。

「いやあ〜結衣のお陰で助かったよ。あのまま右手だけだったら、二人は兎も角、俺はやられてたかもしれないよなあ〜」

こういう事を言えば……ほら、結衣の顔は恥ずかしそうに赤くなつて、強気そうな顔をしながらも嬉しさが溢れてますって、全部顔に書いてある表情になっちゃうんだ。そこで、おきまりの

「別に和哉の為に私が戦ったんじゃないんだからね！ 私は一人で四機を相手にしたかっただけよ！」

「でもさホント、オレのくグングニール>だって、結衣だったら避けられると思っただからこそ！ 撃てたって物だよな！」

さすが誠だ、この機に乗じて自分の非まで有耶無耶にさせるつもりだな。

これも、俺達幼馴染特有の連携攻略法だ。当然、こういう台詞にも

「ふ、ふん！ 当然よ！ 私を誰だと思ってるのよ」

と、腕組んで、あまり無い胸を張って自信満々な表情をするんだよね。もはやパターン化しているんだよな。攻略サイトの運営出来

るくらい、俺と誠は結衣を把握してるんだ。

そんなやりとりをしていると、俺達三人に筐体使用の順番が回ってきた。

俺達は、それぞれ空いている筐体に搭乗すると、プレイ料金の三円を投入する。

俺は、今の今までの為に貯めに貯めたクレジットと、部品を使って、中間テストの問題用紙の裏にビッシリ書きこんだ設計図を基に、新しい機体を組みあげていく。〈タケミカズチ〉を解体し念の為パーツとAIは全てセットにしたまま保存しておくことにした。俺が、今組みあげているのは普通の機体使用するパーツの三倍の量とクレジットをつぎ込んで作成する規格外の物だ。

この〈疾風機兵アサルト・コア〉は、その自由設計性の高さから周囲から”オタク”向けと思われるし、事実、自分自身のこと”今時のオタク”だと思っている。俺が言う”今時のオタク”ってのは、服装とかお洒落だし、見た目も悪く無いのに、趣味に関しては自己満足を極める人のことを言っている。所謂”釣りバカ”だ。って俺から言わせれば”オタク”だし、週末には必ずゴルフに行く親父達も”オタク”だ。

おっと、話が脱線したな。このゲームの最高に面白い部分ってのは、自分の思うままに、武器だろっが、制御機構だろっが、AIだろっが全部設計出来るってことだ。そこで俺が思いついたのは、昔の変形機構を持ったスーパーロボットだ。このゲームをプレイしている人の中には、人型から飛行形態とかの変形については実装している人が何人か見受けられる。でも、人型から人型の変形で設計するのは一握りだ。その理由は、変形機構の制御AI開発が凄く難しいからだ。主な理由として普通の機体にはAIを一つしか実装しないという点がある。だけど、俺は分かったんだ。変形用のAIを分けて開発して組み込むってことだ。んで、今俺は筐体のコンソールを使って、〈タケミカズチ〉で学習させたAIのコピーへ更に手を

加えたAI<イザナギ>を開発してる。<イザナギ>には変形後の機体制御用に三つのモジュールが組み込まれていて、俺の<タケミカズチ>と、誠と結衣の機体からAIの情報をモジュールとして提供して貰った。

機体のカスタマイズに正味四分以上掛けたところで、俺の機体が完成した。

カスタマイズ画面にあるテスト運用画面では、俺の新たな機体がスムーズに変形し、自由に動き回っている。運動性ステータスの補正用に新規導入した新型の<慣性除去装置イナーシャル・リムバ・デバイス>も、運動性の向上になり効果的に作用しているようだ。

俺は、テスト項目を全て終わるとコンソールに付いている音声チャット機能を起動して、誠と結衣を呼び出した。

電子音と共に全天周囲モニターの正面の上方向に二つの窓が開いて、誠と結衣の姿が映される。誠は自分の機体のテスト運用を、結衣は目元の化粧を直していた。

「二人ともお待ちせ！ いける！ 最高だ！」

俺は自分の上がりきったテンションを隠さずに、二人に完成の喜びを全力で告げた。

「おおーやっとか！ オレも和哉が作った新型の慣性除去装置、試してみたぜ！ ス克蘭ブル発進時の運動性が特に上がったな！それに被弾して吹き飛んだ時の戦闘復帰シークエンスが明らかに向上したぜ！」

「私の<ブラックキャット>も、明らかに敏捷性があがったわよ！さすが和哉の作ったパーツだわ」

「よっしゃ！ そんじゃー早速オンライン対戦で、どっかの誰か達を血祭りに行こうぜ！」

俺達三人は、二人から八人までのチームで行われるオンライン対戦にエントリーした。一八秒で一回、戦闘の決着を付けるチーム戦方式の物だ。これらの戦闘はゲームセンター内に設置された大型モニターで場内に流れ、そこで行われるロボットアニメのような力メラワークに順番待ちの人たちも、気持ちを熱くさせながら待つことが出来るようになっていた。ちなみに個人戦方式は、他にチーム戦を行っている人がいない時だけ、モニターで流れるようになっていた。このゲームはチーム戦で行うことがメインなのだ。

俺達は「只今対戦者を受け付けています」と表示された文字の下にあるプログレスバーが徐々に伸びるの横目に、新しい機体での戦闘方法について、作戦を練りながら待っていた。

しかし、待てど暮らせど一向に画面が変わらない。

さすがに一分が経過したところで、俺達は『係員呼び出し』のボタンを押したが、全然現れる気配が無い。

しびれを切らせた結衣から、一度筐体から出ようと声が掛けられ俺達は、一度出ることにした。が、筐体の上下開閉式のハッチが開かない。

「ちょっと！ コレどうなってるのよ！」

「こりゃ、オレ達閉じ込められちまったんじゃないか？」

「ははは、笑えねエ冗談だな！ オイ！」

俺がハッチを思いっきり蹴飛ばすと、画面の文字が【只今対戦者を受け付けています】から【NOW LOADING・・・】に変わった。

それと同時に俺達の耳に、得も言われぬ気持ち悪い音が鳴り響く。それは、老婆の慟哭どうくのような音と、鉄板を無理矢理引き裂くような音だ。

音が止むと同時に、俺達の意識は“切断”されていた。

## 第2話 再起動（前書き）

空想科学2011参加作品です。



## 第2話 再起動

俺は瞼の裏側からでも眩しいと感じる光に照らされ、咄嗟に目を手で庇<sup>かば</sup>おうとするが、少しも改善されなかった。まるで目の前に太陽でもあるんじゃないか？ そんな風に感じ始めたところで、光が途端に弱くなった。俺は、恐る恐る目を開けると、さっき三人で入った全天周囲モニタ型の筐体の中で、出入り口であるハッチの目の前に倒れていた。

完全に目が慣れた俺は、外の様子が気になってハッチを開けてみることにした。さっきは『ウンともスンとも』言わなかった上下開式のハッチが、普段のゲームセンターで開く時とは違う圧縮された空気を吐き出すような音と共に、動き出した。

俺は最初に自分の目を疑った。定番だが自分の頬を抓<sup>つか</sup>ってみる。

もちろん普通に痛い。思いつきり深呼吸をすると、ザラついた空気の所為で咽<sup>むせ</sup>てしまった。俺がハッチを開けて見た景色は、あちこちマナーが悪い客に吐き捨てられたガムがこびり付いた床や、タバコのヤニで黒ずんだ壁等のゲームセンターのそれでは無く、真つ黒な黒煙を拭き出して倒れるロボットと、あちこちで爆発をしている戦場の風景だった。

驚いた俺は、とっさにハッチを閉じて、腰が抜けたのか尻もちをつくと、震える手でポケットの中にしまい込んだ折りたたみ式の携帯電話を開いてみる。しかし無情にも【圏外】の文字。『誠と結衣はどうしたんだろうか』そんな、考えが浮かんだ時、電子音が筐体の中に鳴り響いた。全天周囲モニタの画面に【CALL】の文字が表示されている。俺は、若干の違和感を覚えながらも、何度も座ったシートに腰かけ、コントロールパネルの電話アイコンが表示された部分に触れる。脇に映し出されたステータス表示を見ると、俺の機体はさっきカスタマイズした、新たな黒い鎧武者のような外見の機体<三機神・スサノオ>のようだ。視線を戻すと、電子音と共に

モニタの右上に窓が現れて、スピーカーから聞きなれた声が響いて来た。

「ちょっと！ 和哉！ 誠！ 二人とも平気！？ ってか、どうなってるのこれ！？ ケータイも使えないし！ 外出たらゲームセンサーじゃないみたいなんだけど！？」

その声を聞いて、幾分か気持ちが悪くなったような気がした。それと同時に結衣も同じ状況に陥っていると分かって、大きく気持ちが沈むのを感じた。なんとも矛盾しているが、そうとしか表現が出来ない。俺は、結衣の問いかけに応えるべく、インカムに手を掛けて、一瞬先ほども感じた違和感を覚えるが、今は返答が最重要事項だと判断して、頭の片隅に下げることにした。

「結衣！ 俺だ和哉だ！ 俺も外見てみたけど、これって戦場だよな！？」

モニタに表示された結衣の顔は少し泣きそうだった。気持ちは分かる。きっと俺も同じような顔をしているだろう。

「もう〜和哉〜なんとかしてよ！ 私、家に帰りたいよ！」

「いや、俺も同じだって、こういうのに慣れてたのは中二で卒業したし……何にしても今の状況が分からない、まさかイキナリ日本が、どこかの国と戦争になって、筐体の中で気絶してる間にここまで戦火が届くとは思えないし……何より、ハッチ開けたら煙出して倒れてるロボットとか居たし、さすがのつくば学園都市とは言え、大型の人型ロボットは無いだろ」

俺が一人で、結論付けるとモニタの左上に新たな窓が開いた。誠の顔が映っている。俺や結衣とは違って、随分楽しそうな雰囲気

出ている。

「二人とも無事みたいだな！　ってかさ、二人とも携帯ゲームの方のストーリーモードってどこまで進めた！？」

この非常時に何を言ってるんだ？　コイツは、今俺達はロボットが倒れて煙を出すようなところにいるんだぞ？　まあ、誠は空気は読めなくても、意味の無い質問はしない奴だから、ちゃんと応えてやるけど。

「俺は、一応今のところ配信されてる分は、全部こなしてるぞ？」

「こんな時になんて質問してるのよ！？　あんた馬鹿じゃないの！？」

「なはは、そう怒るなって、気持ちは分かるけど、怒っても何も解決しないだろ？　この景色さ、どうかって見たことあんだよな、和哉分かるか？」

俺は誠の問いかけに対して、いままで倒れているロボットや爆発にばかり目が行っていた視線を、周囲の建造物や遠くの景色に向けることにした。

「コレは……お台場湾岸エリアか？　『ゆりかもめ』がリニアモノレール式になっているし、これは＜アサルト・コア＞のお台場湾岸エリアだ！」

＜疾風機兵アサルト・コア＞ストーリーモードの舞台は七五年後の日本と中国、韓国が舞台になっている。まだ配信されていないコンテンツに、ヨーロッパやアメリカなどがあるのだろう、というのがネット掲示板で一番有力な推測だ。そして、俺達三人が立っているこの場所＜お台場湾岸エリア＞とは、周囲を東京湾に囲まれた地

域でレジャーランドなどの施設が集中した場所である。つまり、この世界も現実の世界も大して変わらないということなんだけど、現在のお台場には無いような建物などから、ここが俺達の知っているお台場では無いということが分かる。何よりも、今、俺達のモニタが映している情景というのは、球体展望室が付いている某テレビ局の正面に位置していて、この場所はストーリーモードの最新コンテンツ配信版を開始した際、最初の作戦開始位置なのだ。

「そう！　つてことは、オレ達つてばくアサルト・コア>の世界に来ちゃったんじゃない？」

「そんな馬鹿なこと、あるわけないでしょ！？　つて言いたいところだけど、私もハッチの外見ちゃったのよね……ストーリーモードつてこの後、どうなるんだっけ？」

「ん……　つと確か、俺達つて謎のロボットつてことで、味方の日本自衛軍と、敵の集団の両方から攻撃を受けるんだよな？」

「そうそう！　そんで、Sランククリアするには、日本自衛軍には攻撃しちやいけない上に、日本自衛軍の損害を――パーセント以内に抑えて敵を撃退する必要があるんだよな。オレこの作戦苦手だわ<sup>ミシヨ</sup>」

誠が言葉を切った直後、俺達のすぐ脇を通り抜けて敵集団からの狙撃が着弾する。某テレビ局の丸い球体が悲しげな音と共に地面に落下した。こりゃ洒落にならなくて……。

「どうする？　逃げる？　隠れる？　私は逃げるの賛成！」

「オレは何も分からないんだし、これがゲームの延長なのか、現実起こったことなのか判断する為にも、敵集団を倒すことが先決だと思っな」

「誠の意見はとても有意義だけど、ここは逃げるのが得策だろう。何より今この状況がゲームと酷似してるからつてゲームの中と一緒だとは断定できない。何より……俺は今、猛烈に混乱している！」

「まあそれが妥当だわな。ここで死んだら、どうなるか分からないし……ゲームだったら<CONTINUE>すれば復活出来たけど、普通に死んで終わりもあり得るしな……何より実際、オレもビビってるし」

「怖い事言わないでよバカ！ アンタの機体は装甲が厚いからまだ良いけど！ 私の機体は紙なんだから、リアリティありすぎなのよ！」

「結衣のことはオレ達が守ってやるよ、なあ？ 和哉？」

「もちろん！ とりあえず、ここは逃げるぞ！ ゲームのマップだとエリア外には出られないんだけど、その辺りの実験にもなるしな……！」

結衣のブラックキャットと、誠のラグナロクが俺の言葉に反応して、戦場に踵を返して飛び立とうとする、俺も同じように飛び立とうと

「ちょっと！ 和哉！ なんで動かないの！？」

「どした？ カスタマイズ失敗したか？」

「あはは……ゴメン」

「「ゴメンじゃない！」」

俺は急いでカスタマイズの画面を起動する。稼働域のチェックは問題無いことをゲームセンターでは確認してある。となると

「問題はAIの設計みたいだ。流しで確認するから、しばらく時間くれ！」

「わかったわよ。バカ！」

「まあ……らしいっちゃ、らしいわな！」

誠のラグナロクが接近する敵の劣化版汎用中距離特化型をグングニールの出力を絞って狙撃する。グングニールは、出力を調整することで、低出力の荷電粒子砲として使用も出来るし、その威力は出力を最大にすることで先のゲームセンターでの戦闘のように極太のビームを発射することも出来る。その射線に捉えた敵機を貫通しながら何機か同時に倒していく。

「うは！ ゲームセンターの手応えより全然”来る”ぜ！ ヤバい、病みつきになりそう〜！」

しかし、敵も標的を日本自衛軍から、こちらの三機に移したようで、倒しても倒しても敵が減る様子が無い。結衣のブラックキャットが敵のだ真ん中で舞うように敵を倒して行くが、ブラックキャットは元々一対一を何度も行つて敵を倒していく仕様の為、今の状況はかなり向いていないと言える。

二人が奮闘するも、敵集団の一部が誠の弾幕を掻い潜つて、俺の機体を射程に捉える。

それと同時に放たれる実弾兵器。

小型ミサイルの乱射だ。

一体から発射されるミサイルの数は、全部で二四発、それらが時間差を掛けて、全て俺の機体に向けられたのだ。

それらを最高出力のグングニールで蒸発させていく誠。

しかし、数が多すぎて、時間差を付けて撃たれたミサイルの半分以上を狙撃することが出来なかった。

「和哉！」

誠の叫びを、連続する爆発音が遮る。

<三機神・スサノオ>が、強烈な火力の中、真っ白な炎の中に消える。

「いやああああ！」

結衣の悲鳴が戦場に響いた。

「このやろう！ よくも和哉を……！」

誠の怒りがラグナロクのグングニルを最大出力で照射させるが、度重なる全力照射に、銃身が持たず、オーバーヒートの警告音がコクピット内で響いている。

そんな二人のスピーカに雑音を伴って声が掛けられた。

「勝手に殺すなよ」

猛烈な炎の中から、一步一步踏みしめるように姿を現せる<三機神・スサノヲ>。

それはまるで、炎から生まれる不死鳥の様に幼馴染の二人には見えていただろう。

「「和哉！」」

ノイズで乱れていたモニタに映し出された窓には、喜びの笑顔を浮かべる二人の顔が写っている。

『マスター、周囲に敵を二三機確認したぜ』

『マスター、<アマテラスモード>による<ECMキャノン>の使用を申請します』

俺はモニタの左下と右下に現れた三頭身のAIキャラクタータに笑みを浮かべて返答する。

「承認する。変形！　＜三機神＞！　モード＜アマテラス＞！！！」

俺の声に反応してＡＩがプログラムを起動する。

『＜アマテラスモード＞変形承認を確認。変形プログラム起動、コード＜恵みの光＞』

＜イザナミ＞の言葉と共に＜三機神＞が空中に飛び上がり、その姿を三つに分けると、再度一つに交わる。

複雑な素体構成が、外側の装甲板と連動して新たな形を作る。  
真っ黒な機体から、神々しい光を放つ赤と橙で彩られた機体へと変形を果たした。

その姿は、女性的なフォルムをした女神の様な出で立ちであり、一六枚の翼が放つ揮発性反重力物質が起こす輝きは後光のようだ。

『マスター、変形が終了したぜ！』

『マスター、変形所要時間　・六秒、少し時間が掛かりすぎました。変形プログラムの見直しを申請します』

「そんなのは後だ！　行くぜ！　＜三機神・アマテラス＞！　掃除の時間だ！　ＥＣＭキャノン準備！」

＜三機神・アマテラス＞の後光を形作る一六枚の翼が、高速で円運動を開始する。

『マスター、ＥＣＭキャノン荷電粒子加速完了まで……参……忒……  
…忒……完了しました』

＜三機神・アマテラス＞の一六枚の翼が二枚合わせで一つとなり、



合計八本の砲身を形作る。

まさに俺がECMキャノンを放とうとした時、誠から声が掛かった。

「和哉ああ！ 忘れてないよなああ！？」

俺とアイツの仲では、もはや暗黙の了解となっていた事だけど、あまりにテンションが上がりすぎて忘れてしまったところだった。誠には感謝せねば、＜三機神＞の門出を祝う祝砲なのだ。お粗末に終わらせるわけにはいかない。

「あはは〜忘れてた！ サンキュ〜誠！」

スピーカの向こうでは結衣が『何の事よ？』と誠に訪ねていた。それに対して誠は『男としてスーパーロボットに乗ったなら通らなくてはならない道だ』と力説している。

俺はニヤ付きながら咳払いして喉の調子を整える。

『マスター、二三機全てをロックオン完了したぜ』

「サンキュ〜<イザナギ>！ これ撃つたら逃げる準備だ！  
エイト・サーキュラ・ミラー  
鏡キャノン！ ファイヤあああああ！」

俺は途中で声が裏が得るアクセントがあつたけど、恥ずかしげも無く、声高に技の名前を叫んで操縦桿のメインウェポントリガーを引き絞る。

<三機神・アマテラス>が展開した八本の砲身から、加速された荷電粒子が連続で発射された。

イナーシャル・リムバ・デバイス  
慣性除去装置を最高出力で使用しなければ、発射と同時に砲身が後方に弾き飛ばされる程の反動を伴って、打ち出された光の弾丸は

光の粒をまき散らしながら、二三機の敵集団に殺到する。

敵集団は緊急回避行動に移るが、亜光速で迫る荷電粒子を避けきれような機体は攻撃予測が出来るAIを搭載したプレイヤ機体くらの物である。劣化版の量産機如きが避けられる速度では無い。

発射した全ての荷電粒子が敵機に着弾。大きな爆発を伴って、俺達に戦闘の勝利を告げた。

「あんた高校一年生にもなって、必殺技の名前叫んで悦になってんじゃないわよ」

スピーカから聞こえた結衣の強烈な一言に、一瞬にして涙目になった俺はきつと世界で一番可哀想な人間だ。そうに違いない。

「女には男のロマンは分からねんだよ！ 和哉！ 最高に格好良かったぜ！ 戦闘中にプログラム解析と修正するなんて”あのアニメ”みたいで最高にクールだ！」

誠からの慰めの言葉で活力を取り戻した俺は、操縦桿を握って異変に気が付いた。俺の<三機神>が反応しないのだ。

「なんか動かないんだけど……」

「あの強烈な攻撃の代償か？ なんか和哉らしいな……」

「ホント馬鹿！ 死ね！」

再度、涙目になった俺には誰からも慰めの言葉は届かなかった。

俺が落ち込んでいると、結衣と誠以外から【CALL】が届いた。恐らく日本自衛軍の物だろう。俺は、結衣と誠に断りを入れるとコントロールパネルの電話アイコンが表示された部分に触れた今度は【SOUND ONLY】のオプションにチェックを入れる。そ

れと同時に、ノイズ混じりでスピーカが相手の声を拾った。

「所属不明機に告げる。直ちに武装を解除して、こちらの要求に答えろ。さもなくば、こちらの攻撃部隊による一斉攻撃を行う。貴殿等の冷静な判断を求める」

高圧的な相手の物言いに、少し頭に来るところもあるが、俺達は食事の用意すら自分達ではどうにもならないのだ。もしこれが”夢”とかで片づけられるなら、そろそろお腹が膨れそうな物でも出てきて貰いたい物である。学校が終わってからゲームセンターまで自転車飛ばした俺達は、途中で買い食いをすることも無かった。どの程度気絶していたのかも分からないけど、少なくとも昼以降何も食べていないのだ。『二人と相談させてくれ』と告げると、相手は『子供！？』などと驚愕の声を出していたが、強制的に通信を遮断する。

「んで、どうする？ 向こうさんは、こう言ってる訳だけど」

「どうするも、こうするも無いだろ？ オレは腹が減った。それだけで理由としては充分だろ？」

「こちらの身の安全は保障してくれるのかしらね。そこが抑えられるなら文句無いかな？」

二人の意見を聞いた俺は、再度相手との通信回線を開いた今度は【SOUND ONLY】のチェックを外す。そこには、いきなり通信を切った所為か、怒り顔の厳つい髭面の男性が映し出されていた。

「貴様！ なぜ通信を切った！？ あまり反抗的だと、こちらも黙ってはいないぞ！」

「なんで、アンタがそんなに大きな態度が取れるんだ？ 確かにア

ンタ達の銃口は俺達を狙ってるみたいだけど、俺達の銃口もアンタ達を狙えるってこと、忘れないでほしいね」

「ぬぐっ！」

「ってかさ、さっきの俺達の戦闘見て無かった訳？ あ程度の奴ら相手に、そんなに数ばかりの戦力を用意して相手しなきゃならなような実力のアンタ達と、三機で余裕を持って葬ることが出来た俺達、どちらが優位に立っていると思う？」

「ぐっ！」

「こちらとしては、穏便に話を済ませたいんだけどね。もう少し話が出来る人はいないの？」

「よくもまああんなことをペラペラと喋ることが出来るわね。和哉」

「ホントだよなあー本人はエネルギー切れで、ともに動くことも出来ずに空中で漂ってるだけなのにさ」

俺の言葉に反応したのか、先ほどの怒り顔の人とは違った人物がモニタに現れた。

青い色をした毛髪を肩口まで伸ばした美丈夫だ。しかし、軍隊という物は、こんな優男でも大丈夫なのだろうか？ なんだかソツチ系な人が多そうなイメージがある。

結衣のモニタから『絶対この人、ウケだわ』なんて言葉が聞こえた気がしたが、今は無かったことにする。

「はじめまして、所属不明の高性能機パイロットの諸君。私は日本自衛軍所属アサルト・コア部隊を任されているナガレ」カゲヤマ少佐です」

「やっと、まともに話せる人が出て来たな。俺はアサルト・コア<三機神>のパイロット？ ……で良いのかな？ 大谷 和哉だ」

「横から失礼しますよ」。オレはアサルト・コア<ラグナロク>の

パイロットの光石 誠おゝ」

「私はアサルト・コア<ブラックキャット>のパイロット、杉咲結衣よ」

モニタの向こうでは、微笑を称えたままの美丈夫カゲヤマ少佐が頷いて返していた。

「それでは、色々話を聞かせて貰いたいんですが、そちらの機体と一緒に私どもの基地までご同行願えますか？」

「俺達の身の安全は保障してくれるのか？」

「もちろんです。もちろん基地では機体から降りて頂く必要があるんですけどね。話を伺っただけです」

俺は、モニタ越しに誠と結衣に確認を取ると、頷いて返してくれた。

「分かった。其方の指示に従おう。カゲヤマ少佐を信用させて貰う」

本心ではビビりまくりだった俺は、話が終わって通信が切れると大きな溜息を吐きだした。

こういう時ってビビって何もできなくなるかと思っただけど、結構なんとかなる物だ……

俺達は、日本自衛軍の後に続いて彼らの横須賀にあるという基地に向かった。お台場から横須賀である、そこそこ距離があるけど、俺達が乗っているアサルト・コアは水陸空両用だ。一直線に海の上を行けばお台場から横須賀なんて近い近い。話しが終わるまでの間に、なんとか動くようになった俺の<三機神>を騙し騙し動かして、普通に俺達の日本で、電車使って移動したら一時間くらい掛かる距離、それを凡そ一分程度で移動してしまった。

横須賀までの道のりは、俺達三人を大きく驚愕させていた。まず海に入る前に見た東京都内は、大きなクレーターが出来る程の大きな一撃でもって壊滅されていたのだ。東京湾の中も、機体の残骸が散らばり、水も淀んで魚も碌に見かけることが出来なかった。

誠が呟くように言った『日本は死んだのか？』の言葉が何か確信に迫っているように思えた。

横須賀の基地に辿りつくと、カゲヤマ少佐の迎えを待つて機体から降りた。ただ、俺の<三機神・アマテラス>は展開された翼を含めた高さが基地格納庫の天井よりも高い為、再度<三機神・スサノヲ>に変形することで事なき得た。

横須賀の基地は地下に広大な面積を持った基地だった。格納庫には俺達ブレイヤからすれば、初期に配られたような機体ばかりが勢ぞろいし、殆どカスタマイズらしいカスタマイズが出来ていないようだった。あれでは、敵の少しカスタマイズされた機体を相手にする時、あんなに数が必要になる訳だ。

横須賀の基地の中をカゲヤマ少佐に導かれるままに進む俺達は、途中カゲヤマ少佐から簡単な説明を受けながら目的地に向かっていった。

カゲヤマ少佐が言うところには、現在外宇宙から現れた異星人が侵略を目的に世界中に攻撃を開始した。それに対して日本・中国・韓国は合同でコレに対抗するため、同盟を結成した。しかし、敵の戦力は最初こそ、戦闘機型UFOでの攻撃がメインだったが、なんとか戦線を保持できると感じた直後、新たに投入されたアサルト・コアによって、大きく戦線は後退し、水際での戦闘が続いているらしい。なんとか多くの犠牲を払って回収した敵のアサルト・コアを解析し、日本が誇る技術力によって急ピッチで設計されたのが、この格納庫内にある機体達という訳だ。

その説明は、携帯ゲームのストーリーモードで遊ぶ時に最初に流れるプロローグと同じだった。俺は少し違和感を覚えて、カゲヤマ

少佐にこちらから質問してみることにした。

「この部隊には、スコットⅡシップドックっていう人がいませんか？ 紫の髪を一つで結わえている人だと思っんですけど……」

俺の発言に誠もハツとした顔をして、カゲヤマ少佐の返答を待った。

スコットⅡシップドックというのは、ストーリーモードに出てくる日本自衛軍に所属するエースパイロットだ。量産型の弱い機体しかない日本自衛軍において、独自の理論を基に、開発者と共に自分の機体をカスタマイズして、プレイヤの戦闘をサポートしてくれる心強い味方だ。

「ん？ 彼を知っているのですか？」

「ああ……知っているとええ知っているし、知らないと言えば知らない」

「？ とりあえず、呼びますか。彼なら先ほどの出撃にも出ていたでしょうし、おそらく自室に戻って整備士に提出する報告書をまとめている頃でしょう」

「お願いします」

俺がスコットの呼び出しをお願いすると、胸からボールペン程の金属の棒を取り出した。

カゲヤマ少佐はボールペンをノックするように、頭の部分を押しと、ボールペンの横にはピンクの光で描かれたノートパソコンのような物が現れていた。そこで、何やら操作をすると、画面にキレイな女性が表示されていた。

「オペレーター、すまないがスコットⅡシップドックを私の部屋まで呼び寄せて欲しい」

『かしこまりました。スコットシップドック少尉をカゲヤマ少佐の所まで伺うように伝えておきます』

「ええ宜しく頼みます」

再度、カゲヤマ少佐がボールペンのような金属の棒をノックすると、ノートパソコンのような表示が消えて、元の金属の棒に戻っていた。

俺は凄く興味を惹かれていた。なんとも、見るからに未来の道具って感じだからだ。隣を見ると誠も同じように興味津津って感じた。それに気付いたカゲヤマ少佐が『もしかしたら、貴方達にも配られるかもしれませんよ?』と言っていた。どういう意味だろうか……格納庫を抜けると、片側二車線の道路が続いていた。地下のくせにどんだけ広大なんだよ。と、心の中で突っ込んだ俺はきつと間違っ  
って無い。

少し、その片側二車線の道路脇で待っていると、一台の車のような物が来た。なぜ”ような物”なのかと言うと、アニメに出てくる未来の車よろしく、空中に浮いているのだ。しかも運転席が無い。右の席も、左の席も、というか前の席なのに真ん中の席があるし、真ん中の席の正面にもモニタがあるだけだ。ってかどうやって、ここまでこの車来たの? 運転手いないんだけど。

カゲヤマ少佐に言われるまま、俺とカゲヤマ少佐が前の席に、結衣と誠が後ろの席に座った。搭乗して扉を閉めると、モニタに美人な女性が映し出された。

『ご希望はどちらになりますか?』

「居住区にある私の自室をお願いします」

『かしこまりました。到着予定時間を設定しますか?』

「時間の指定はありません。安全運転をお願いします」

『かしこまりました。それでは発進します』



「通りのやりとりを終えたモニタの女性がそういうと」車のような物”が誰が運転するでもなく、音も出さずに走り出した。発車時の慣性も特に感じることもなくスピードを上げて行く。

「この車って、もしかして慣性除去装置が付いてるの？」

俺の疑問を結衣が代弁してくれた。さすが幼馴染だな、疑問に思うことが似ている。

カゲヤマ少佐が身体を捻って後部座席に視線をやりながら、結衣の質問に答えた。

「そうです、この車にはアサルト・コアに搭載されている慣性除去装置が内蔵されています。と言っても性能は随分落ちますけどね。これが付いていれば余程大きな事故でも起こさない限り、衝突が原因で事故死することはありません」

「余程大きな事故って、すでにこの車一　キロ以上のスピード出してるわよね？　この速度で事故ったら余程大きな事故に分類されそうなんだけど……」

「このくらいのスピードでしたら、軽い方ですよ。大きな事故には時速二　キロ以上からですかね。この慣性除去装置でしたら時速二五　キロくらいまでなら、ほとんどの衝撃を無効化できます」

「二五　キロって新幹線なみの速度じゃない……」

そんな雑談をしながら向かったカゲヤマ少佐の自室は、入った瞬間に驚いてしまうような広さだった。俺のボキャブラリーを最大限に発揮するなら……『象が百人乗っても大丈夫！　って感じだ！』昔のCMにそんなのがあった気がする。なんで象なのに、百人なのか分からないけど……。

閉ざされた自室の中には水族館ばりの大きな水槽があって、そこにはTVドラマで見たことがある古代魚……シーラカンスだっけ？

アマゾンにいるデカイ奴。そいつが悠々と泳いでいた。

「和哉、シーラカンスじゃない。アロワナだ」

何故か誠には何を考えているのかモロバレだった上に、間違えた方向性までピッタリと当てられてしまった。さすが幼馴染だな。

俺達三人が大きな水槽に見惚れていると、少し自慢げな雰囲気を出したカゲヤマ少佐が、鼻息を荒くしながら熱烈に説明してくれた。

「コレはね！ 南米にあるアマゾン川という川の環境を再現しているんだよ！ あそこにいる一・二メートルの銀色の魚はシルバーアロワナって言うてね！ そして、底の方にいる四メートルの魚！ あれはピラルクって言う名前で、淡水では最大とか言われているんだよ！ あとあと！ 底の方に居る平べったい魚！ 分かる！？ あれはモトロって言うて淡水でも買えるエイなんだ！ もっと大きな水槽に出来ればピンクイルカを泳がせたかったんだけどね……上層部に申請したんだけど、なんとかこのサイズで我慢しろって押し切られちゃってさ…… 本当残念ですよ……」

きつと俺達三人の心は今一つになっている。そう、一番残念なのは貴方ですよカゲヤマ少佐……と。何より、結衣と誠の表情が物語っている。

この手の人は、趣味の話を始めると何時間という単位で、同じことを繰り返して話せるツワモノだ。俺と誠、結衣も少なからず、その手のネタはそれぞれ持っている。ここは早く話を切り替えるのが上等手段だ。

「それで！ オレ達がココに連れて来られたのは何でだ？ ご飯に呼んでくれた訳じゃないのか！？」

多少強引だが、さすが誠だ。今の空気の流れを断つのは真面目な話が向いている。そして、最後に少し笑いの要素を入れることで上手くオブラートに包んでいるな。

誠の言葉に一瞬嫌そうな顔を浮かべたカゲヤマ少佐は『それじゃあ、水槽の話は、本題が終わった後にゆっくりするとして……』と言いながらソファを勧めて来た。

健闘もむなしく、この後の趣味談義地獄が確定してしまった瞬間だった。

真っ白な灰になったボクサーのようにソファに座りこむ誠。俺と結衣も勧められるままソファに腰掛けた。

俺達がソファに座ったことを確認して、カゲヤマ少佐が口を開く。

「まずは君達に謝らせて貰いたい。私の部下の非礼をお詫びしよう」

カゲヤマ少佐が深々と頭を下げる。俺達三人も別に、カゲヤマ少佐に頭を下げてもらうつもりも無かったので、直ぐに顔を起こしてもらったことにした。

「今は、もう気にしてませんから」

俺がそう告げると、カゲヤマ少佐は男でもドキツとしてしまいそんな程キレイな笑顔を浮かべて『良かった……』と呟いた。

隣で結衣が『やつぱりウケだ』と小さく呟いたことは、俺の全力全開のスルースキルでもって、完全にスルーすることにする。ただ「する」って言うつもりだ俺は……。

カゲヤマ少佐は笑顔から真剣な顔つきに変わると、少し聞き辛そうに俺達に質問してきた。

「短刀直入に聞きます。貴方達はどこから来ましたか？　そして、何故”ヤツら”と戦っていたのですか？」

なんとも核心に迫った良い質問だ。俺が応えることを纏めている内に、誠が先に口を開いた。

「オレ達は西暦二一一年の日本から、やってきました。何故ここにいるのかは分かりません。”ヤツら”と戦っていたのは、あちらから攻撃を仕掛けられたので、自衛の為に反撃し撃破しただけですよ」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ？ 西暦二一一年の日本？ 今から七五年前から来たっていうのか？ 今、私達が使用している機体よりもずっと高性能な機体を七五年も前に開発出来たとは、到底思えないんだが……」

「正確には少し違うと思います。俺もこういうこと言うのは中二で卒業したと思ってたんだけど、いわゆるパラレルワールドって奴とかなんだと思います」

「パラレルワールド？ 君達の世界の二一一年には、あんな高性能な機体があるのかい？」

「それもちよつと違いますな。えつと……なんて言ったら良いのかな……俺こういうの苦手で……」

「和哉しっかり説明してよね！ 私が説明してあげるわよ！ えつと……信じられないかもしれませんが、私達の時代に存在するゲームの世界が、この世界のようなんです。もちろん、元々のゲームの世界とは微妙に違うみたいなんですけど、私達が使用していた機体、あれはゲームの中で私達が使用していた機体なんです。つまり私達がゲームの世界に入ってしまった。もしくは、私達の世界がゲームのようになってしまった。ということだと思います」

カゲヤマ少佐は、俺達の説明に唸るように考え込むと、溜息をついて、さっぱり分からないと言ったジェスチャーをし、声を発した。

「分かりました」

「「「ええ！？」」」

「ん？ どうしました？」

「「「今、分からないってジェスチャーしたじゃないですか！？」」

「

「ん？ そうですか？」

このカゲヤマ少佐って人が少し人とズレているのか、やはり俺達の文化とは少しズレているのか、俺達にはまだ分からなかったけど、とりあえずこのカゲヤマ少佐って人が、信用できないような人では無いということが分かった。もちろん、まだこの日本自衛軍という組織そのものについては、全然分からないけど、この世界で俺達が出来ることと分からない以上、今ある繋がりだけは大事にしなきゃならない。俺達はそんなことを考えていた。

「まあ」なにわともあれ”です。古来より”腹が減っては戦は出来ぬ”と言いますし、水槽の話でもしながら食事にしましよう！今、持って来させます！」

コレが無ければ良い人なんだろうけど、それはきつと無理な話なんだろうと、俺は心の中で軽く落ち込むのだった。

### 第3話 セキュリティホール（前書き）

空想科学2011参加作品です。

### 第3話 セキュリティホール

俺は、小学生の頃に遠足で筑波の宇宙博物館へ行ったことを思い出していた。当時の俺は、『宇宙だ！ ロボットだ！ 宇宙コロニーだ！』などと、迂闊にもハシヤギまくり、家のお土産と自分の為に、持ってきたお小遣いの許す限り宇宙食を購入してしまった。しかし、俺の味覚にとてつもなく合わなかったのだ。しばらく母からオヤツとして、それが出された時期があった。それも……無くなるまで。認めたくない物だ、自分自身の若さゆえの過ちという物を……なぜ、そんな話をイキナリ始めたのかと言うと、カゲヤマ少佐に御相伴させて貰った料理と言うのが、まさにソレと同じような味だったからだ。見た目も匂いも凄く美味しそうで、ちゃんと”サバの味噌煮”や”味噌汁”、”炊きたて風ご飯”などの純和食で提供された晩御飯だったのだけど、味が保存食のそれなのだ。七五年後だと言うのに、味についてはクオリティが激下がりしている。これはもしか、人類の舌は退化してきているのでは無いか？ そんなことを考えていた。

俺が感じていることは、幼馴染の二人も同様に感じていたようで、耐えかねた結衣がカゲヤマ少佐に逆の意味で『コックを呼べ！』とでも言いそうなくらい、青筋を立てて質問を始めた。タダ飯食わせて貰ってるのに態度がデカイと思ったけど、俺としてもこの味は正直キツイので原因が知りたい。最悪、厨房と食材を貸して貰えば、俺でももう少しマシな料理が作れるという物だ。気持ちの中では、結衣を心から応援しつつ、表面上の態度では結衣に少し抑えるようにジェスチャーする。そう、俺は世渡り上手なのだ。本音と建前を使い分けてこそ、この就職氷河期を生きていけるという物だ。

「なんで！？ 和風の食事で手作り感が伝わってくるのに、こんなに保存料のような味がする訳！？ 今時、缶詰開けただけだって、

「まともな料理が出てくるわよ!?」

まさに俺が言いたかったような事を丸々言ってくれた幼馴染に感動の拍手を送ってあげたい物だ。もちろん、実際は興奮して立ち上がった結衣を宥めてソファに座るように促している訳なんだが。

俺が座るように促すと、あまり抵抗もせずに結衣はソファに腰を落ちつけていた。もちろん表情については悪鬼羅刹の如く感じて感じただけ。ってか、どんだけ食べ物の恨みは怖いんだよ! あんま料理上手く無い俺が作った料理だって、結衣はこんなに激怒し無いぞ! 俺の手をまな板の上に開いて置いて、果物ナイフで指の間をカッカカツ! って突き刺す、昔遊んだ遊びをほんの三秒満面の笑顔でやられるだけで済むぞ! ……あれ? 俺の方が明らかに……いや、何でも無い……気付かなかったことにしよう。

カゲヤマ少佐は苦笑いを浮かべると、困ったような口調で話し始めた。

「ヤツら」が攻めてきてからというもの、まともな流通はストツブしてしまいましたね。プラントで季節も関係なく大量に作られる農作物も、物流が止まっては宝の持ち腐れという奴でして……近くの海で採取される海中プラנקトンを洗浄し、加工することで実物にかなり近い味にすることは出来ていますが、所詮プラנקトンですからね……栄養価はあっても味は偽物です……」

カゲヤマ少佐の話によると、お台場で俺達を襲ってきた「ヤツら」が原因で、ここの人達はまともな食事をする事が出来ないってことだ。しかし、技術の進歩ってのは凄いな、海中に漂うプラנקトンって、ジンベイザメとかが食べてるヤツだろ? その海中プラנקトンってば、植物性や動物性のもいるから、栄養価については問題が無いらしい。あれを基にして、見た目も味も実物にそっくりに出来ちゃうってのは、未来の話だ。あ……一応、未来なんだっけ



か。

俺達がカゲヤマ少佐の水槽談義を、なんとか別の話に逸らしながら食事を終えると、一人の白衣を着た”いかにも”な気難しそうなメガネ女性が入ってきた。緑の髪は長く伸ばされ天然なのか軽くパーマが掛かっている。リムレスのメガネを掛け、少し濃いめの口紅の色が印象的な美人だ。スタイルは若干細すぎる感はあるけど、出るとこは必要最低限出ている印象を受ける。まあ、白衣の所為でよく分からないんだけどね。

「ん？ アキラ、何か分かったのですか？」

カゲヤマ少佐の発言で、件のメガネ美女は<アキラ>という名前だということが分かった。中性的な名前から、俺の脳では勝手にツンデレキャラが設定された。これでツインテールにでもしていれば、ガチだろうが……まだ声も聞いていない。判断は少し先に延ばすでしょう。

<アキラ>と呼ばれた女性が、胸元からカゲヤマ少佐も使用した金属のボールペンのような物の先をノックすると、先ほど同じようにピンクの光で作られたノートパソコンのような物が浮かび上がった。

「これを見て欲しい」

なるほど、中々女性にしては低くて少しハスキーがかった声だ。これは未成年の時からロックバンドでシャウトし続けてきたか、タバコを愛用していたに違いない。見た目から察するに前者だと俺は勝手に確定させた。あんなに細いのに病的な細さを感じさせないからだ……ん？ あれ？ 待てよ……ロックバンドってのは、俺の勝手な偏見だが、常にタバコを啜えて『ぷっかぁ』としているイメージがある。これは、どちらも正解という可能性が出て来たぞ……

参ったな。

「和哉、それはある意味どうでも良い」

俺の心の声が完全に幼馴染にはダダモレだぜ！ 昔見た、思っていることを周囲の人間に知られてしまうという能力、というか呪いのような物を持った主人公の映画を思い出した。もしかして、俺って……その主人公と同じことになってるんじゃない

「ちがう、口から洩れてる」

どうやら俺の心の声が、心の中に留まることを知らず、口から飛び出していたらしい。どうやら”この世界”に来て俺は精神的に結構来てるのかも知れない。もうダメだな。これで俺は落ち込んで、部屋に引きこもり、敵が来ても出撃せず、艦長に殴られて『親父にも！』とか叫んじゃうんだ。そうに違いない。

「それは楽しそうだな。名シーンだ」

「何の事だか、サッパリ分からないわ！」

あのシーンだと直ぐに分かる辺り、さすが誠だと言わざるを得ない。というか、そろそろ俺の心の声が口から出ることを止めさせなければ、高校一年生の男子たる者、何時如何なる時に放送コードに引っかかる内容を妄想しかねない。このままの状態で、そんなことに遭遇したら、俺のアイデンティティは脆くも崩れ去ってしまうだろう。今のはちゃんと意識して口を閉ざしていたぞ！ これなら、もう誰にも俺の考えを聞かれてしまうことは無い。

無理矢理口を閉ざしながらニヤけている俺の表情を見て、軽く引いている幼馴染二人の事は、俺の鍛え抜かれたスルースキルによって完全に回避しておくことにする。

そんなどうでも良いことを話していると、カゲヤマ少佐が神妙な面持ちでこちらにやってきた。アキラさんを引きつれて。

「君達、大変なことが分かりました。もしかしたら、君達がコチラに現れた理由かも知れない……いや、時期や場所を考えるに、その可能性は高いと思われます」

「君達が現れた、お台場海浜公園周辺では”ヤツら”の新型兵器が先ほどの開戦直前に使用されているのだ。というかあの時こちらが、あれだけの数を揃えて出撃した一番の要因と言っても過言では無い」

俺達三人と彼ら二人の温度が、まったく違っていた状況から一気に同程度の温度に落ち付いたことを肌で感じた。

「新兵器というのは？」

誠が神妙な面持ちで二人に問いかける。

少し考えた素振りをするアキラさんに頷いて応えるカゲヤマ少佐。意を決したようにアキラさんが言葉を発する。

「我々は『次元砲』と呼んでいる」

なんとも中二病の匂いが漂うネーミングだ。誰だ、そんな名前付けたのは、そんな奴が某掲示板でそんなことを言ったら一発で『中二乙』とか言われてしまうぞ！

俺の心の声はどうでも良いと言わんばかりに話は順調に進んで行く。

「その『次元砲』ってのを使われたから、私達は”コッチの世界”に来ちゃったっての？」

「ちよっとオレには考えにくいですねえ」

結衣と誠の返答に少し困った顔を見せるアキラさんとカゲヤマ少佐。

「しかし、データを見る限りでは、その可能性が一番高いのだ。」  
「何にしても、君達は”ヤツら”がああ『次元砲』を使用した直後に現れたんです。それは事実の一つとして受け止めましょう。今は何も手掛かりが無いのですから……」

カゲヤマ少佐が話をまとめようとした、その時。

基地の奥深くにいるにも関わらず響いてくる大きな振動に、俺は思わず尻もちをついた。誠は何とか立ったままの姿勢を維持していた。結衣でもある。というか転んだの俺だけだった。大きな水槽の中で揺れる水に揺られている魚達が目に付いた。なんだか、魚がみんな俺を見ているような気がする。

なんとなく気恥ずかしい気がして、恐らく赤くなっているであろう表情を隠しながら立ちあがると、お尻の埃を払った。気を取り直して、一つ”コホン”と咳をして、拳を握りしめて声を張り上げた。

「今のは一体なんだ!？」

色々突っ込みたいこともある。と言わんばかりの幼馴染達の脇で、ノートパソコンのような物を除きこんでいた大真面目な顔をしたカゲヤマ少佐が口を開いた。

「て、敵が次元砲を使用した……」

それを聞いた俺達は驚愕の表情を浮かべた。

「どういふことですか!？」 さっきの戦闘から、まだ二時間とたつ

「ていませんよ!？」

「だが事実だ」

誠の問いかけに、事実のみで応えるアキラさん、俺こつという人苦手だ。

カゲヤマ少佐が脱いでいた上着を手に取ると、手慣れた手つきで素早く身に纏う。

「これから我々は『次元砲』の奪取または破壊を行います。君達はこちらで待っていてください」

カゲヤマ少佐の一言に俺達は再度驚愕した。

「何故ですか!？ オレ達の戦力なら楽勝だぜ!」

「そうですよ! 私達が戦えば!」

「……………」

俺は、俺は二人の熱意に押されて『俺は戦いたく無い』という言葉葉を飲み込んだ。さつきのお台場の戦闘こそ、敵が劣化版の初期設定兵器ばかりだったのに対して、今は敵の新型兵器がこちらを狙っているのだ。

敵の戦力が分からないのに命を掛けるのは、余程の豪傑か、蛮勇以外の何物でもない。今はゲームの時とは違うかもしれないのだ。ゲームの時ならば、敵に敗れても、賭けたクレジットを失って、また機体も復活すれば、プレイヤ本人に対するペナルティも基本的には発生しない。発生しても金銭だけだ。だけど、今はそれがどうなっているのか分からない。もし、敵の攻撃によって死んでしまったら? そのまま死んでしまうかもしれない。もしかしたら”元の世界”に帰れる可能性もあるだろう。だけど、それを試すのは、あまりにもリスクばかりが勝ち過ぎている。今のオレ達に出来る最善は、

とりあえず”死なないこと”だ。そう考えた時、俺達はあるべく戦わない方が良くということになる。

そんな俺の考えに沿うかのように、カゲヤマ少佐が幼馴染たちの発言に対して否定の言葉を口にした。

「ありがたい話ですけど、君達はこの部屋から出ることが出来ないのです」

カゲヤマ少佐の言葉に俺は驚愕する。

「トイレとかどうするんですか!？」

「部屋に備え付けの物があります」

一蹴された。

「貴方達の戦力で、新兵器を含めた”ヤツら”に対抗出来ますか？」

誠の信を突く質問に、言葉を詰まらせた様子のカゲヤマ少佐。

「しかし、君達の疑いが完全には晴れていない……私がいくら弁護したところで、それは変わらないでしょう……この基地は私が守ってみせます。だから安心して見ていてください」

カゲヤマ少佐は部屋の壁に備え付けられていた大型モニタに外の様子を表示させると、アキラさんを連れて出て行った。

俺達は、すでに戦場となっている東京湾の様子を見つめることが出来なかった。

「敵の戦力は!？」

パイロットスーツに着替えながらカゲヤマが近くの兵士に対して、  
問いかける。

「敵は重装甲高火力支援型が八機！ 新型と思われる見慣れない機  
体が一機です!!」

「数は大したことないですが……その新型……気になる。機体の判  
別は出来ないのですか？」

「はい、残念ながら……全く新しい機体ですので……」

苦虫を噛み潰したような顔を浮かべる兵士を見て、ニコやかな笑  
顔を浮かべるカゲヤマ。

「大丈夫ですよ。私が、どんな敵でも倒してきてみせます」

兵士の心中を察しての発言は、この兵士の中に目覚めさせてはな  
らないバラの火花を灯してしまったことを、罪作りなカゲヤマは気  
付かないのだった。

正座した形で、自らの主の帰りを待つ愛機<汎用中距離特化型・  
リガン>に、カゲヤマは身軽に飛び乗ると機動チェックを掛けてい  
く。

そのコクピットは和哉達が駆るアサルト・コア同様に全天周囲モ  
ニタを使用した物だ。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

モニタの右下にメイドの格好をしたAイメージが表示される。  
それは、栗色の長い髪を大きな白いいりボンで、ツインテールに結ん  
だ愛らしいAエマスコットだ。

「ただいま、＜アイリス＞これから戦場に向かいますよ。ミリタリーモードで各種起動お願いします」

『喜んで、ご主人様！』

＜アイリス＞の返答後、ほんの一 秒程で戦闘態勢での起動を終える。特別なカスタマイズをせずに、この速度を捻りだすには、そうとうAIに学習を施す必要がある。

カゲヤマが駆る＜リガン＞がりニアカタパルトへと一步一步踏みしめるように進んで行く。赤い『READY』のランプから、緑の『GO』のランプに切り替わった。

「ナガレ」カゲヤマ少佐、＜リガン＞。 出ます！」

リニアカタパルトから弾き飛ばされるように大空へと飛び立つ＜リガン＞右手に装備した中距離で絶大な威力を発揮するアサルトライフルを腰溜めに構えて、左手に装備した中型の盾を前方に出し、そのまま敵陣に向かう。

＜リガン＞同様にリニアカタパルトから射出された後続機が＜リガン＞を先頭に菱型陣形を取る。後続は＜劣化版汎用中距離特化型・バガン＞が八機だ。スカーミッシュ

「各機、敵はイエーガーが八、新型が一だ。先にイエーガーを撃ちます！ ＜バガン＞三機で二チームを作り、一体を集中攻撃。撃破した後、直ちに次のイエーガーに移りなさい！ 新型は私がやります！ スコット機はついて来て下さい！」

＜リガン＞が速度を増して、新型に迫る。敵の新型は、手に持っていた長物の近接武器をクルツと回して持ち替えたかと思うと、一見槍のように見える武器が姿を変えてライフルのようになっていた。



そして、放たれる強力な銃弾。

<リガン>を急速上昇させて回避行動に移る。相手の新型の攻撃は、あきらかに『挨拶代わりだ』とでも言いたげな程、狙いが甘い。<リガン>も手に持ったアサルトライフルで射程距離外にも関わらず牽制射撃を放った。

敵の新型は、これを難なく回避する。敵の新型までの距離を詰めたくリガンが、ココからが本番だとアサルトライフルの照準を敵新型の合わせて攻撃を開始した。

お互いに有効打撃を与えられないまま、一定の距離を保ち、時に接近、離脱、回避、牽制とスキの無い攻防が繰り広げられていた。援護についている僚機の<バガン>も<リガン>の攻撃の間を縫う形で上手く援護してくれている。

揮発性反重力物質を撒き散らしながら、輝く光の道を描き出す両者の戦いは、これを戦いと認識していない者が見れば、一種の芸術にも見えていたことだろう。

およそ三分ほど続いた攻防で、<リガン>のアサルトライフルが再装填を求める。それを自動で回復させるAIの<アイリス>は極めて優秀と言えるだろう。中型の盾を使って手元を隠しながら再装填<sup>リロード</sup>を完了させる。

しかし、その隙を敵の新型は見逃さなかった。再度、長物の武器を回転させると、先ほどとは少し形状の違うライフルのような物に変わる。そして、放たれる攻撃。

ライフルのような形状にも関わらず、放たれたのは銃弾では無く、ミサイルであった。しかも簡易誘導式だ。先ほどと同じ直線運動をする銃弾だと思い込み、上昇回避を取っていた<リガン>は左足に被弾する。その衝撃で翻筋斗<sup>もんどり</sup>を打って東京湾に着水、水上を転がるように転倒する。

『ご主人様、<リガン>左足損傷・損害大。基地での修理を申請します』

「カワイイ私の＜アイリス＞。今は耐えておくれ！ まだ戦れます  
！」

＜リガン＞のスラスタ―が揮発性反重力物質を勢いよく噴き出し、  
海水から空高く舞い上がる。

手に持ったアサルトライフルの射程距離にまで迫っていた新型に  
対して牽制の射撃を放つ、しかし牽制とは言いつつも全てが着弾コ  
ースだ。そのいずれも軽々と避けていく新型機。

その様子をカゲヤマの私室のモニタで見ていた誠が言葉を漏らす。

「カゲヤマ少佐の腕は悪く無い、オレ達がゲーセンで普段戦ってる  
中に入れても、上の下と言ったところだろうな……だけど、機体の  
性能が違いすぎる……特にA Iだ。他の味方機に比べて、まだ動き  
が良いところを見ると、A Iも日本自衛軍の中では高レベルの物な  
のだろう……だけど、敵の新型は、プレイヤーレベル……！」

そう誠が言葉を漏らした瞬間、敵の新型が見せた動きは、誠の言  
葉を止めるのに十分な衝撃があった。カゲヤマが中距離から一気に  
距離を詰めて、盾に隠してあった近距離武器であるサーベルで、攻  
撃を横なぎに払った瞬間、敵の新型が宙返りに半捻りを加え、＜リ  
ガン＞を飛び越えて回避したのだ。カゲヤマの後ろを取った形だ。  
誠の驚きと同様に俺も驚愕の台詞が口から出ていた。

「あ……あれは！ バーチカルターン！？ ゲーセンでも中々見な  
い高等テクニクだぞ！？」

敵の新型がカゲヤマの＜リガン＞を後方から容赦なく斬りつける。  
その剣線は、武器を持った右手と、残った右足を切断する物だ。敵

の新型はカゲヤマをなぶり殺しにするつもりなのだろうか。そう俺が考えた瞬間、敵の新型はカゲヤマの<リガン>を一瞥すると、置き去りにして自分の僚機であるイエーガー達の援護に飛んで行った。それを必死で追いかける<リガン>の僚機である、スコットの<バガン>だが、そもそも運動性能に大きな違いがあつて、置き去りにされていた。

「カゲヤマ少佐……見逃して貰ったのかな？」

「なんだか興味を無くしたような感じだったけど……」

「でも、マズイな。オレ思っただけど、あの動きをみる感じだとカゲヤマ少佐って、この日本自衛軍でエース級だったんだろ？ 負けちゃったってことは、このまま敵はコッチの主要施設に向かつてくるってことじゃないのか？ スコットの腕が良くても量産機に毛が生えた程度の性能じゃ……」

「「あ……」」

誠の言葉が切っ掛けになったのか、基地が大きく揺れる。小さい音が音も響いてきた。

「この揺れは！？ 敵のイエーガーが放つ遠距離攻撃だ。たぶん、クラスター爆弾の機能を搭載したミサイル攻撃だ！」

部屋の電気が点滅し始める。点滅する光源によって恐怖が増強される。途端に結衣が泣き崩れた。

「私まだ死にたく無い！」

「お、落ち付け！」

「こんな所で死ねるかよ……！」

俺は入口の扉を蹴りつける。しかし、扉はビクともしない。思い

つきり引つ張ったり、部屋にあつた椅子を取つてに引っかけて挺子てしを使って開けようとするも、やはり微動だにしない。

俺が諦めかけたその時、戦場を移していたモニタの画面が切り替わった。

『マスター、俺と会えなくて泣いてなかったか！？』

『マスター、助けに来ました』

『誠様、私に感謝して下さいね』

『結衣ちゃん、私の魔法で連れだしてあげるわよ！』

その声は、俺達アサルト・コアで補助を行ってくれるパートナー達だった。俺のAI、太古の日本人のような格好をした三頭身の少女<イザナギ><イザナミ>、誠の北欧神話の女神で際どい格好をした五頭身の<フレイ>、結衣のは、俺達が小学生の頃に女子の間で流行った、黒猫を連れた魔法少女をイメージした四頭身の<リリカ>だ。

俺はとりあえずの疑問を口にした。

「お前ら！ どうやってここまで！」

『マスター、ここまではこの施設のネットワークを使って来たに決まってるじゃないか』

『マスター、私の手に掛かれば、このくらいのセキュリティは何てことありません』

「<フレイ>！ この扉を開けてくれ！」

『誠様の頼みですもの、今すぐに』

誠の指示に従った<フレイ>によって、カゲヤマ少佐の私室に掛けられたセキュリティロックが外され、扉がスライドして開け放たれた。

「でも、ここまで車をかなり飛ばしてきたんじゃない！　ここからどうやって格納庫まで行くのよ！」

『結衣ちゃん、私の魔法なら簡単よ！　えいつ！』

カゲヤマの私室の目の前に乱暴な運転で、来た時と同じ形の車がドリフト気味に停められた。

『それじゃあ結衣ちゃん、私達は途中の機械を混乱させながら、来るのを待つてるから！』

『私の誠様に無礼を働いた者には、お仕置きを与えなくてはなりませんね……』

『マスター、早く出ようぜ！俺、戦いたくて、しょうがねえよ！』

『マスター、お待ちしております』

俺達は、カゲヤマの私室を飛び出すと少し斜めに止まっている車に飛び乗った。モニタに先ほどと同じ案内の女性が映し出される。

『ご希望はどちらになりますか？』

「格納庫！」

『かしこまりました。到着予定時間を設定しますか？』

「今から五分以内で！」

『かしこまりました。かなり急ぎますので、シートベルトを着用して下さい。それでは発進します』

一通りのやりとりを終えたモニタの女性がそいうと車が、先ほどと同じように誰が運転するでもなく音も出さずに走り出した。発車時の慣性も特に感じることもなくスピードを上げて行く。

さっき来た道を猛スピードで走り抜ける。交差点などもあるが、完全に制御された車には”赤信号”のような物は存在せず、お互い

に縫うように相手の間を走りぬけていく。あまりに速い為、俺達に周囲の様子が詳しく分からなかったが、どうやら俺達のAIたちの悪戯によって混乱が生じている。敵の攻撃が近くに迫っていることもあって、格納庫に近づくにつれて、混乱の波は大きくなっていった。俺達は格納庫に到着するや否や、車から身を低くしながら飛び出し、色々な物の陰に隠れながら自分の機体に近づいた。

既に機体に戻ってきたAIの自動操縦によって、機体の手を使ってコクピットのハッチまで持ち上げて貰い、乗り込む。

シートに飛び乗り、ベルトで身体を固定する。

手元の携帯ゲームの電源を入れて、手元のコンソールの電源も入れる。

モーター音のような甲高い音を伴って、全天周囲モニタに外の様子が映し出された。

「<イザナギ><イザナミ>、発進準備だ」

『マスター、分かったぜ！ ミリタリーモードで起動！』

『マスター、了解です。各種システムオールグリーン。<三機神・スサノヲ>発進できます』

俺は手元の操縦桿とフットパネルを確認する。手元のコントロールパネルで、結衣と誠を呼び出すと、同じように発進準備が完了していた。お互いに頷いて確認し合う。

<三機神・スサノヲ>が一步一步踏みしめるように格納庫を進む、すでにセキュリティを掌握していたAIによって使用出来るようになったリニアカタパルトへ向かった。赤い『READY』のランプから、緑の『GO』のランプに切り替わる。

「<三機神・スサノヲ>発進する！」

<三機神・スサノヲ>がリニアカタパルトを弾けるように射出さ

れる。

「命懸けはご免被るけど、何もせずに死ぬのは主義じゃないんでね！ さあ！ 楽しいゲームの時間だ！」

<三機神・スサノヲ>が東京湾の海上を反重力物質を巻きながら、光の尾を引いて飛ぶのだった。

#### 第4話 オーバークロック & ハンゲアップ（前書き）

空想科学2011参加作品でしたが、諸事情により間に合いませんでした。

ですが、しっかり完結させますので、よろしくお願い致します。



## 第4話 オーバークロック & ハンゲアップ

俺は感触を確かめるように手元のデバイスをイジる。指先が鈍るような感触を振り払うかのように、指の筋を伸ばす。伸びをしようとして狭いコクピットだということを思い出して自重した。

すでに前線は指揮官機が落とされたことで統制を失っている。自衛軍のスコットが無理な攻めを捨てて、敵新型の動きを牽制し、自機も回避に専念することで新型機による被害は最小限に抑えられているものの、イエーガー八機による猛攻によってバガン部隊は壊滅状態だ。

「遠距離タイプに対して中距離武器が主兵装の汎用中距離特化型じや相性が悪すぎる！ 結衣！ あつちのバガン部隊の援護に回ってくれ！ 俺と誠はスコットのバガンを援護しつつ相手を変わる！ スコットには前線の指揮代行に専念してもらうことにする！」

「分かったわ！ スコットが来るまで前線をキープすれば良いのね！？」

「おっしや！ 新型が相手か！ 腕になるぜ！」

相手はエース級のカゲヤマ少佐を落としたヤツだ。だけど、先の戦闘を見た感じ、敵の性能はスカーミッシュを元に設計された機体だ。俺の三機神・スサノヲは汎用近距離特化型だし、誠のラグナロクは重装甲高火力支援型だ。近接で俺の三機神・スサノヲが注意を向けて、誠のラグナロクで狙撃による支援をすれば十分撃墜可能だろう。

ラグナロクがグングニールの出力を絞って敵新型を狙撃する。俺は三機神・スサノヲを全力で走らせて主兵装であるHCMソードを抜き放った。その剣は全長が三機神・スサノヲ

>の七割もある大剣で、<タケミカズチ>の時に使用していた<アミノオハバリブレイド>を元に再設計を行った武器だ。特徴は、堅く分厚い装甲を切断する鋭さと伸び縮みする刀身である。最小で標準の二分の一、最大で二倍の長さに変化させることができるのだ。

敵の新型が挨拶代わりに放った誠の一撃を苦も無く回避すると、思い切りのよい突進で誠との距離を一気に詰める。イエーガーである誠の<ラグナロク>は基本的に中遠距離において、その豊富な攻撃力を発揮できる機体であるが、それ故に近接での戦闘能力はオマケ程度しか持ち合わせていない。敵の状況判断能力には舌を巻くものがあつた。

俺は<三機神・スサノヲ>を誠と敵新型の間に割り込ませる。それを読んでいた誠は、割り込むタイミングが分かっていたように牽制射撃を止めていた。

<HCMソード>を回避しにくい逆袈裟で切り上げる。先のカゲヤマ戦で見たバーチカルターンを防ぐための処置だ。この<HCMソード>は伸縮自在の刀身がある。最悪、無理矢理バーチカルターンで回避されても刀身を伸ばしながら追いかければ良い。敵新型はバーチカルターンで回避するのでは無く、バックステップで距離を取った。単純にバーチカルターンで俺の<三機神・スサノヲ>の背後を取ったとしても、誠のラグナロクに背中を見せることになる。それを嫌ったのだろう。

俺と誠に対峙したまま一定の距離を保つ敵新型の間合いは、遠距離武器では微妙に照準が合いにくく、近接武器で突撃するにも距離がありすぎる。そんな絶妙の距離感であつた。

ただ、俺と誠が新型と対峙しているということはスコットには結衣たちの増援として向かってもらうことが出来るということである。俺は敵新型を睨みつけたまま、少し離れた所で敵新型に対して銃を向けているスコットが乗る<バガン>に対して【CALL】した。すると、こちらが話し出すよりも早くスコットの声がスピーカから響いてきた。

「こちらくバガン」のスコット。君達はお台場に現れた子達だな！  
？ 出撃許可が下りたのか！？」

「今そんなこと、どうでも良い！ スコット、あんたにはくバガン  
＞部隊の指揮を取って貰いたい。今くバガン＞部隊はカゲヤマ少佐  
が墜とされて統制が取れていない。結衣が戦線をキープしているが、  
それも奇襲と機体相性のお陰だ。数で押されたら、すぐに崩れてし  
まう！」

「ユイ？」

「今、敵イエーガーに近接戦闘を行っているパイロットだ。あの子  
が時間を少し稼ぐ、今の内にくバガン＞部隊を統制しろ。ここは俺  
達二人で良い」

「……つく。分かった！ ここは頼む！」

スコットのくバガン＞が踵を返してくバガン＞部隊に向けて飛び  
去る。そうはさせるか、と反応をした敵新型の進路方向に対して俺  
はくHCMソード＞の刀身を伸ばして行く手を阻んだ。

「あんたには、俺達二人の相手をしてもらう！」

「和哉！ なんだか死亡フラグっぽい台詞だけど、めっちゃカッコ  
イイぜ！」

レーダーの端を一機の機体がこちらに向けて近づいてくる。イエ  
ーガーに対して連続攻撃を当てつつ、ヒット・アンド・ウェイでか  
く乱戦法を取っていた私は、遠目に見える和哉と誠の戦闘が少し冷  
静に見えていた。

スコットが操るくバガン＞が味方の部隊と合流を果たした。すで  
に、統制は整いつつある。私の背後から援護射撃が降り注ぎ、モニ

ターには「CALL」が表示されていた。私は、それに触れると、モニタの右上に小さな窓が開き、何度かゲームで見たイケメンが表示されていた。どこの国の人間か分からない、それくらい整った顔立ちに紫のロングヘアそれらを一つに纏めてポニーテールにしている、美青年だ。

「こちらくバガン>のスコット。ユイ、援護感謝します」

「いきなり呼び捨て!？」

「申し訳ありません、ユイ様! あちらのお仲間の方がユイと呼んでいらしたので!」

「まあ、別に構わないけど! 私がこれから一体ずつ片付けていくから、アンタ達は牽制射撃をしながら敵の動きを封じて! さすがにくバガン>に乗ってるスコットじゃ、頼りにしたら悪いしね!」

「? 了解です! 敵イエーガーに対して牽制攻撃を行い、動きを封じます!」

スコットの了解という言葉から一秒も立たないうちにくバガン>部隊から牽制攻撃が降り注ぐ、ちゃんと私に当たらないように配慮している辺り、さすがスコットだ。ストーリーモードで唯一のエースパイロットだけのことはある。

私は、牽制攻撃をバツクに一機のイエーガーに肉薄する。くバガン部隊>が牽制しやすいようにイエーガーの後ろ側に回り込むとくブラックキャット>得意の連続攻撃を叩きこんだ。

「一! 二! 三! …… …… 十七、十八!」

敵のイエーガーが爆散する。私は次の標的を視界に捕えて間を置かずに駆けだしていた。

「あの装甲が厚いイエーガーを…… あんな一瞬で!？」

スコットの驚愕した声がモニタ から聞こえてくる。そういえば通信切るの忘れてた。

爆音が聞こえてくる。結衣が敵のイーガーを撃破した音だ。敵新型から眼は離せないが、先ほどから聞こえていた散発的な銃撃音が雨のように降り注ぐ音に切り替わっている。スコットが統制を取ることで体制を立て直したくバガン＞部隊が、結衣の機体を援護する為に弾幕による援護射撃を行っているのだろう。

「うひょー、ありやたまんねえな！　いくら装甲が厚いイーガーでも、あんだだけ撃たれると反撃も出来ねえんじゃねえか！？」

「あつちは大勢が決したな。こつちもそろそろ始めるか！」

俺の声に反応して誠がくグングニール＞の出力を少し強くして攻撃を放つ。敵の新型に大きく回避させる為だ。しかも敵新型の気持ち左側を狙うことで、右への回避確率を上げている。

敵の回避予測方向にくHCMソード＞で攻撃を繰り返す。

しかし、敵新型は既に攻撃を予測していたのか追尾性の無いくグングニール＞の攻撃性能を逆手に取って、後方に飛び上がるように回避すると、そのまま俺と誠を無視して、結衣がいるイーガー部隊のところに向かった。

「しまった！　結衣、そつちに敵新型が向かうぞ！」

俺と誠が急いで敵新型を追いかける。しかし、敵新型は空中適正が高く、速度もかなり早い。対して俺のく三機神・スサノヲ＞は空中適正は並みであり、地上適正を高めに設定してある。誠も同じよ

うな設定の為、敵新型との距離はぐんぐん離されてしまう。

敵新型が結衣の<ブラックキャット>に対して有効射程距離ギリギリからの狙撃を放った。

結衣はイエーガーに攻撃を集中しつつ、スコットと連絡を取っているのか俺の言葉に気付いていない。

<ブラックキャット>の右足に着弾する。<ブラックキャット>は近接高速戦闘用に軽量化と柔軟性を重視した結果、装甲は薄く敵の攻撃に対する防御力は無いと言ってもいい。<ブラックキャット>が右足を失って横転する。

「結衣いい!!! 貴様あああ! やらせねえよ! <イザナギ>! モード<ツクヨミ>だ! 早くしろ!」

『マスター、了解だぜ! <ツクヨミモード>変形指示確認。変形プログラム起動、コード<静かなる宵闇>』

高速移動中の機体はその慣性を維持したまま、その姿を三つに分けると、再度一つに交わる。

複雑な素体構成が、外側の装甲板と連動して新たな形を作る。

真っ黒な機体から、漆黒の夜空に浮かぶ真っ白い月のような、幻想的で神秘的な中に微かに感じさせる鋭さを持った輝きを放つ機体へと変化していく。

その姿は、女性的なフォルムでありながら<アマテラス>のような柔らかなイメージは無く、どこか死神を連想させる物だ。

『マスター、変形完了したぜ!』

『マスター、変形所要時間は』

「そんなのは後だ! 間に合ええええ!!!」

<三機神・ツクヨミ>の空中適正は三形態中で最高に設定されている。そして運動性能はアサル・コアの設計上、運用時間に制限

が掛かる程に偏った設定になっていた。

アサルト・コアというゲームは搭乗者の疲労度や耐久力が全搭乗者一律同値の値が設定されていて、それらの数値と機体の限界値を相談させながら設計していく仕様になっている。俺の<ツクヨミ>は、運動性能を搭乗者の疲労度・耐久力を著しく消耗することを犠牲にし、アサルト・コアで出される速度の限界に挑戦した機体なのだ。

モニターの上下に【A L E R T】の文字が点灯し、警告音がコクピット内に響く。

<三機神・ツクヨミ>が空気の壁をぶち抜いて、更に加速する。モニターの中心以外は色の付いたスピード線のように変化していた。

とてつもないスピードの中、俺は<三機神・ツクヨミ>の主兵装を<実体剣・単分子カッター>に変更する。

それは、このスピードの中で敵新型を銃で打ち抜く技量が自分には無いことを理解しているからだ。

目の前に敵新型が迫る。

「<イザナミ>！ 慣性除去装置全開！ 早く！」

『マスター、了解です！』

俺は敵新型の胴体へ叩きつけるように剣を振るうと、急停止を行った。慣性除去装置が無ければ、俺は身体の中身がひっくり返るほどの衝撃を受けていただろう。

代わりに音速を超えたスピードで迫った際の衝撃波は大きな空気の塊となって敵新型を叩きつけていた。

敵新型は切りつけられた胴体が寸断され、続いて発生させた衝撃波の影響を受けて吹き飛ばされていた。

「結衣！ 大丈夫か！？ 結衣！！！」

少しの間を置いて、モニターに結衣が表示される。

「へへへ、遅いよ。和哉」

「わりい」

「結衣いゝ！！ 大丈夫かあゝ！？」

なんとも気の抜けた声を掛けて来た、もう一人の幼馴染に二人揃って苦笑いで応えてやることにした。

「誠、遅過ぎ！」

「いやいやいや、和哉の機体が早すぎるんだって！ 明らかに音速超えてたからね！ あんな戦闘機みたいな速度、人型で出せるわけ無いから！ むしろ、あんな速度出して和哉の方が心配になるし！ オレら生身の体で戦ってるんだぜ！？ ゲームの時みたいに、耐久力や疲労度はただのステータスじゃないんだからな！？」

「そういえばそうよ！ 和哉あんた身体大丈夫なの！？」

誠の発言で途端に心配になったのか、最初に心配してくれた誠よりも明らかに結衣の声が大きい。

「あははゝ、実際かなり気持ち悪いかな。でも、大丈夫！ 俺が作った慣性除去装置をフルパワーで使ったから」

「なら良いんだけど……基地に戻ったらお医者さんに見て貰おうね？」

「そうだぞ！ 車の事故なんかでも、あとから痛いところが出てくるって言うからな」

「……分かったよ。戻ったら、カゲヤマ少佐にお願いしてみる。残りのイエーガー部隊の方も、スコットの指揮でくバガン>達だけで



なんとか撃破出来たみたいだな。新型の方は？」

俺が視線を敵新型が吹き飛んだ方向に向けてみると、上半身だけになった敵新型が少しだけ動いているように見えた。

「……敵の新型はまだやれるみたいだな。上半身しか無いけど」

「敵を知つとくのも悪くないんじゃないか？ 動けるなら、パイロットは生きてるんだらう？」

「そうだな……よし、俺と誠で見てくるから、結衣はスコットに連絡を入れてくれ」

「はいはい、私はここで留守番ね。早く戻って来なさいよ？」

俺と誠は、モニター越しにサムズアップで応えると機体を敵新型の上半身が転がる場所へと走らせる。

敵新型は下半身を失った為、一匍匐前進 ほふくぜんしん のように動きながら自らの下半身のもとに向かっていた。

「もしかしてコイツ、下半身のとこまで行ってカスタマイズ修理するつもりなんかなあ」

誠の推測は恐らく間違っていないと思う。まだ俺達がつくばのゲームセンターで遊んでいた時、戦闘中に機体の修理をすることは何度かあったからだ。損傷具合によってメンテナンスに掛かる時間は様々だが、俺の<タケミカツチ>が左腕を吹き飛ばされた時で九〇秒という時間が掛かった。おそらく、その一〇倍は掛かるのではないかと思われる損傷具合だ。戦闘中に九〇〇秒という時間を無防備に晒すという愚行、しかし機動力の無い現在の状態では、帰還することもままならないからこそその行動なのだろう。だが、それは投降する意思は無いと言うことと同義だ。

俺は<三機神・ツクヨミ>が装備している<単分子カッター>を

敵新型に向けると声を張り上げた。

「投稿しろ！ 言葉が通じるならハッチを開けて姿を見せるんだ！」

しかし、敵新型は依然として自らの切断された下半身に向かって匍匐前進を続けている。

それを見ていた誠が疑問を漏らした。

「やっぱ、言葉通じねえのかな？ ってか、そもそも人なんて乗ってるのか？」

「コクピット決じ開けてみるか？」

俺は誠の呟くような言葉に対して応えようと、ハッチをもぎ取るようにしてコクピットをこじ開ける。

そして、そこには見たことも無いデザインだが、しかしハッキリと、それと認識出来る物を身にまとった姿が俺の目に飛び込んだ。

<三機神・ツクヨミ>の手から、もぎ取ったハッチが音を立てて地面に落ちる。

「どうしたんだ？ 和哉？」

誠が訝しむように敵新型のコクピット内を覗きこんだ。俺は口の中が急速に乾いていくのを感じていた。

「？ 人間！？ 日本人か！？ ってか待てよ……あの着てる服は、見たことねえけど、制服か！？」

手が震える、口を動かしているのに言葉が出てこない。何故だろう、凄く息苦しい。制服のネクタイを緩めてワイシャツの第二ボタ

ンまで振るえる手で悪戦苦闘しながら開ける。何故だ……冷や汗が止まらない。なんで？　なんで？　なんで？　なんで？

誠が小さな声で呟いた。

「コイツ……死んでるのか？　匍匐前進を続けてるのは……この敵新型のAIが自立行動でやってるのか？」

誠の言葉が途中からよく聞き取れない……死んだ？　殺した？　誰が？　俺が？　俺が日本の学生をコロした？　俺の中の何かが壊れる音がした。

「うああああああああああああああああああ……！！！！」  
「どうした！？　和哉ああ！！！！」

誠の問いかけを最後に俺の意識は、現実を拒絶するかのよう閉ざされていった。

## 第5話 デバッグ（前書き）

今回は少し早めの投稿です。

お気に入り登録して頂いてる方々、お待たせしました。

## 第5話 デバッグ

真っ暗だ何も見えない……違うか。何も見えないんじゃない。何も見たく無いんだ。なんで、こんな事になっちゃったんだろう。俺は人を殺したいわけじゃなかったのに、ただ結衣が危なかったから、敵を倒したただけなのに、でも人を殺してしまった。どんな理由があれ、俺は殺人者なんだ。きっと、日本の法律でいうなら過剰防衛とか正当防衛とか、そんな括りになるんだろうとは思う。でも、法律が許しても俺が、俺自身が自分を許せないんだ。大切な幼馴染を守るためには仕方なかったとも思う、だけど殺さずに助けることが出来たんじゃないか？

あれに人間が乗っていたなんて知らなかった。っていうのは言い訳にしかない、乗っている可能性は十分に考えられたんだ。ゲームセンターでも中々見られないような高度な操縦技術、あきらかに細かい部分までカスタマイズが行き届いた機体。あれは、敵の重装甲高火力支援型や日本自衛軍の<バガン>や<リガン>とは明らかに違う物だった。

それに、あの敵新型はカゲヤマ少佐が乗る<リガン>をあえて”殺さなかった”行動不能にしたことを確認したあと、味方の救援に向かったんだ。性能に差があるスコットの<バガン>に対して、スコットを殺さないように力量を見極めて応戦していたのかもしれない。あれだけの性能差があれば、撃墜することは容易だっただろう。少しこじ付けかもしれない、けれど……そう考えれば俺の中で辻褄が合っちゃする。あの敵新型は……人が乗っていることを認識していたんだ。でも、それはそうなのかもしれない……ヤツらは日本に攻めてきていたんだ。敵新型のパイロットはアジア系だったし、顔立ちは中国や韓国のような雰囲気では無く日本人のそれだった。

俺達と同様に何かしらの力でアサルト・コアの世界に迷い込み、敵側につかざるを得なかった、同じ日本の学生だったのかもしれない

い。

俺は心のどこかで、今居るここがアサルト・コアという”ゲーム”だと甘い考えを持っていたということだ。相手を倒すということ、それは相手を殺すということ。俺の設計した機体は、ゲームの中では高性能機体だ。それはゲームセンター内の戦績である勝率七割という実績からも現れていると思う。でも、この世界では手加減をしてもオーバーキルになる程の性能差になっていた。ゲームセンターでプレイした時と同様に戦い、実際に相手を殺してしまったということだ。

自分の認識の甘さに反吐が出る。

俺は思考の海、暗く重い奥深くへと沈んで行った。

「どう？ 和哉の様子は」

「ダメだ。ハッチを開けてくれないから分からねえ……【CALL】にも応答してくれねえし……<ラグナロク>の手でハッチを引っぱがす訳にもいかないからなあ」

私達は、戦闘が終了した後、叫び声を上げて動かなくなった和哉の乗った機体を、私と誠の機体で基地に運び込んだ。同時にスコットが指揮する<バガン>部隊の方もカゲヤマ少佐の<リガン>や損傷の大きな機体、あとは敵の新型を回収して基地に戻っていた。<バガン>部隊は基地に格納を済ませると、整備班の人と戦闘の勝利に対して勝関かちどきを上げ、とても盛り上がっている。でも、私達はそんな気分にはとてもなれない。私達は和哉の機体の収容を終えると、可動式乗降機を移動させハッチの目の前で声を掛け続けた。

和哉は一度大きく発狂したように声を上げた後は、気絶してしまっただのか声を発することも無く、まるで死んでしまったかのように静かだった。今もハッチの外から声を掛けたり、誠がコントロール

パネルから「CALL」をしてみるけど、そのいずれにも応える気配が無い。

和哉が受けたショックは、私にも少しは分かる。戦った相手は、同じ世界の地球から来たと思われる同年代の人間だった。それは、つまり……いや、やめよう。言葉にしてしまうと、今まで築いてきた物が大きな音を立てて崩れてしまいそうな気がする。それに、和哉の受けたショックが私にも分かるなんて言っただけど、そんなのは幻想だ。和哉が受けたショックの一部分でも分かる訳が無いのだから。和哉は敵新型を撃破した。彼の手で……。

「なんで……こんなことになっちゃったんだろう……」

「……オレにだってわかんねえよ……」

私の心から零れ落ちた言葉に、誠が応える。私達は一体どこに来てしまったんだろう。なんでこんなことになってしまったんだろう……私達は戦わずに基地に籠っていれば良かったの？ でも、そしてたらあのまま全員死んでいたのかもしれない。答えの無い疑問ばかりが頭を駆け巡る。きつと、今の私以上に和哉は傷ついている。助けになってあげたい。私じゃ力になれないかもしれないけど……

溢れ出る涙の滴が、膝に零れ落ちて、初めて自分が泣いていることに気が付いた。

不意に後ろから声が掛かる。

「おーい！ お前達凄いな！ 敵を倒すことが出来たのもお前達のお陰だ！ こっちに来て一緒に祝杯上げようぜ！ なぁーに、無断で基地を飛び出したのは不問だろうよ！ あのまま、お前達が敵を”殺して”くれなきゃ、俺達は全滅してたかもしれないんだぜ！」

たぶん、さつき出撃したくバガン>部隊の一員。戦いの勝利に気持ちが高ぶっているみたい。この人達は、今私達が抱えてる苦悩な

んで、きつと分らないんだ。

「黙れよ！ 人を殺して喜べるわけないだろ！！！！」

「誠……やめて……」

「こつちはな！ 人を殺したくて戦ったわけじゃないんだよ！」

「誠……」

誠の怒声に格納庫内の喧騒が一気に静かになる。騒いでいた人達の視線は全て誠に注がれ、それらの多くは『士気が高まつてる中に水を差すんじゃないよ』と言った雰囲気纏う冷たい物だった。その中の一人が小さな声で呟くように言葉を放つ。

「……お台場で散々殺してたじゃねえか」

小さな声で呟かれた言葉を、私の耳はしっかりと拾っていた。きつと、私の眼は大きく見開かれているだろう、一瞬呆然としたけど、思い出したように誠の顔を伺う。さっきの小さな声を私は聞こえていた。きつと、隣の誠も……。

「てめえ………今……なんて言った？」

「あ？ なんだよ？ 事実だろ！？ お台場で敵の部隊を一掃してたじゃねえか！ 一掃じゃないな”皆殺し”だったな！」

「ぶっ飛ばしてやるから歯あ食いしばれよ！！ コラア！」

目を血走らせた誠が、乗降機から飛び降りそうな勢いで動き出すのを私は縋りつくようにして止めた。

「やめてよ！ やめて！ 和哉の前で……そんな声出さないで………」



誠はハツとしたような顔をして私を見ると、そのまま視線をハツチに向けて振り上げた拳をゆっくりと下ろした。

その様子を見ていた隊員が、人を馬鹿にしたような台詞を大声で吐き出す。

「ハッ、威勢が良いのは口だけかよ！ 戦争が怖いお子ちゃまは、シエルターにでも逃げて隅っこでガタガタ震えてりや良いん……ガハッ！」

私達を罵っていた隊員が、何者かに左頬を殴られて転倒する。私が殴った人に視線を向けると、その人はスコットだった。

「お前は何様だ？ お前の命が今ここにあるのは誰のお陰だ！ 彼らを侮辱することは、このスコット＝シップドッグが許さない！」

転倒した隊員は、スコットに殴られて唇でも切ったのか、手の甲で口を拭うと怒りの矛先をスコットに変えたようだ。スコットに向かって立ちあがると、床に血混じりの唾を吐きだした。

「てめえこそ何様だ？ 最年少でアサルト・コア部隊に配属されたからって粹がつてんじゃねえぞ！ そういや戦場でも、随分出しゃばってくれたよなあ？ カゲヤマ少佐が居なくなつた後の指揮権は、先任少尉のこのアレフ＝クルサード様にあるだろうが！ スコット少尉殿よっ！」

アレフと名乗る隊員がスコットの右頬を殴りつける。スコットも唇を切ったのか右唇の端から血が覗いていた。

「自分が敵新型を抑えている間！ お前は前線の指揮を一つも取つてなかったじゃないか！ 先任少尉だろうが、年上だろうが実力も

無いのにハシヤグンじゃねえよ！」

スコットがアレフの右頬を殴りつける。次第に二人は言葉よりも手が出ることになり、ただの殴り合いになっていった。

先ほどまで誠に冷たい視線を向けていた他の隊員達も、今は格納庫の真ん中で殴り合いを続ける二人に声援や野次を送っている。

「良いぞ〜！ 二人とも！ ヤレ〜ヤレ〜！」

「アレフさん！ そんなガキはぶっ倒しちゃってくださいよ！」

「スコット〜！ 今日こそ下剋上だあ〜！！！」

周囲の喧騒を聞くに、この二人は何かとやり合っているみたい。その喧騒も次に登場した人物によって終わりを告げる。

「これは何事だ！！！」

声の主は格納庫の入り口付近から悠然と歩いて来る。あの顔には見覚えが……でも思い出せない、頭の上にクエスチョンマークを浮かべていると、誠が呆れたような顔を浮かべて教えてくれた。その顔には先ほどのような怒りの感情は見えなかった。

「お台場で最初俺達に命令してきた、厳ついオジサンだ……」

誠の言葉で思い出した私は『ああ、あの人ね』と軽く返答を返した。

厳ついオジサンは、殴り合いをしていた二人の近くまで後ろ手に組みながら近づくと、その厳つい容姿そのままの殺気が籠った視線で一同を見渡した。

「お前ら……何をしていた？」

その言葉に、スコットとアレフは姿勢を正した。

「ハッ！ デュネス大尉殿！ レクリエーションであります！」とスコット。

「部隊内の親睦を深めておりました！」とアレフ。

「ふん！ レクリエーションだ？ …… スコット！ 貴様は整備班に提出する報告書は書いたのか！？ アレフ！ 貴様は先の戦闘に関する報告書を書いて提出しろ！ カゲヤマ少佐はしばらく医務室から出られん！ 貴様が報告書を提出するんだ！」

「ハッ！ 直ちに提出します！」とスコット。

「ええ…… 了解です……」とガツクリした様子のアレフ。

「貴様らもサツサと職務に戻らんか！ 立て続けに敵が襲ってくるかも知れんのだぞ！？」

「ハッ」

デュネス大尉と呼ばれた厳ついオジサンが、乗降機に乗る私達に對して睨むような視線で一瞥すると、『ふんっ』とでも言いそうな雰囲気で踵を返し、格納庫から出て行った。

「あの人、偉い人だったんだね」

「部隊の中には、ああいう威圧的な人も必要ってことなんだろうなあ」

「和哉…… どうしよう……」

「整備班の人に頼んで、ハッチを開けて貰うしかないかなあ？」

私と誠が諦めて整備班の人に頼むことにしようとした、その時、私が手に持っていたS A N Y製携帯ゲームの電源が勝手に入った。

「あれ？ 勝手に電源入った……おかしいな」

「勝手に電源入る訳ないだろ？ 服に擦れて電源入ったんじゃないか？ 電源がスライド式だから、オレもたまにやるぜ」

私は首を振って否定する。

「ううん、ちゃんと【HOLD】にしておいたもん」

「ん？ じゃあおかしいな？」

OSが起動し、自動でアサルト・コアが起動される。すると、メインタイトルの画面では無く、アサルト・コアに搭載されたAI用の専用部屋CGの画面になっていた。

「あれ？ 勝手にAI用の部屋になっちゃったよ」

「ん？ 本当だ……ってか、随分少女趣味な内装だな……似合わねえ」

「ウルサイな！ 私に似合わなくてもくりり力>ちゃんにはピッタリなの！」

そんなやり取りをしていると、AIの部屋に3Dで描かれたくりり力>が現れた。

『はああゝい、結衣ちゃん！』

「くりり力>ちゃん！ もしかして、電源入れたのってくりり力>ちゃん？」

『そうだよあゝ、結衣ちゃんが困ってる気配を感じて……来ちゃった！』

今の様子を見ていた誠が呆れ顔で溜息を吐きだす。

「ハア……勝手に電源入れるって、どんな影響力持ってたんだよ。それにA Iが心配って……」

誠の言葉を見殺してくりりカ>ちゃんと話を進める。

「うーん……たしかに困ってるけど……あのね、和哉が乗ってるく三機神・ツクヨミ>のハッチが開かなくて困ってるの、和哉応答してくれないし、さっき戦闘で無理な戦い方したし、悲鳴も上げてたから心配で……」

『おっけー！　つまり、そのハッチを開ければ良いのね！』

「簡単に言っと、そうね……出来るの？」

『私にお任せ！　ちよつとくイザナギ>君とくイザナミ>ちゃんにお話しして来るね！』

くりりカ>ちゃんは、そう言っと画面が【現在、通信中です】って画面に切り替わってしまった。隣で覗きこんでた、誠が呟くように口を開く。

「A I同士、結構仲良さそうだよな」

「そうね……でも、こんなのでハッチ開くのかな」

私がそんな台詞を言ったことがフラグになったのかは分からないけど、圧縮空気が洩れる音が響いたかと思うと、ゆっくりとハッチが上下に開かれていく。

手元の携帯ゲーム機に視線を落とすと、Vサインを作っているくりりカ>ちゃんがいた。

「くりりカ>ちゃん、ありがとう」

『どういたしまして！　結衣ちゃんの為だもん！　じゃあーまたねえー』

<リリカ>ちゃんがそう言うと、今度は勝手に電源が切れた。私は、制服の内ポケットに携帯ゲーム機をしまつと、コクピット内を除きこんでいる誠を掛ける。

「誠？ 和哉は？」

誠がゆつくりと、こちらを振り返る。その顔は真っ青で、あきらかに良くないことが窺えた。

「結衣……医療班を……医療班を呼んでくれ……早く！」

誠の震える唇から発せられた強い言葉に、私は弾けるように飛び出して、格納庫中に響き渡る声で叫んでいた。

結衣のAI<リリカ>のお陰で開いたハッチに、オレは結衣と<リリカ>へのお礼も言わずに飛びこんでいた。

今まで呼びかけに返事をしてこなかった原因について、仮説を立てていたオレは、もう一度内容を確認していた。

まず一つめは、<三機神・ツクヨミ>の最大加速に慣性除去装置の許容量をオーバーした負荷に対して、時間差で身体が悲鳴を上げて気絶している。これは、かなりマズイ。脳に損傷があつて、時間差で発症したことも考えられる。

そして二つめ、同じ世界から来たと思われる日本人の格好をした人間を、死亡させてしまったことから来る精神的ストレスによる気絶だ。これも、かなりマズイ。確実にトラウマになるだろう。それは、オレや結衣も同じだけど、実際に手を下した人間の死体を見てしまふというのは、現代の倫理的常識を持ったオレ達にとって、精

神的ストレスは半端じゃないだろう。

そして三つめ、両方だ。はつきり言つて最悪以外の何物でも無い。どんな対処をしたら良いのか、まったく想像もつかない。

そして四つめ、以降は一つめからの気絶していないバージョンだ。全部で六パターンあるが、オレは恐らく……。

オレは狭いハッチの中に身を乗り出して和哉の状態を確認する。言葉を失った。

普段、日常生活をする上で鼻血というのは普通に見かけることがある。だけど……和哉は鼻と耳の穴から出血していた。

急激に体温が下がっていくのを感じた。掌から冷たくて嫌な汗が噴き出てくる。喉の奥が急激に乾いて、呼吸をするとヒューヒュー音がした。

結衣が声を掛けてくる。

「誠？ 和哉は？」

オレはゆつくりと、振り返ると掠れる声を無理矢理押し出して、結衣に伝えた。

「結衣……医療班を……医療班を呼んでくれ……早く！」

結衣が弾かれたように飛び出していき、格納庫内で大声を張り上げて聞こえた。

オレは、和哉の頭を極力動かさないように横抱きに抱えると、狭いハッチから身体を横向きに変えてなんとか降りる。

乗降機を下していくと、すでに見たことも無い空中に浮いたカプセル型の担架のような物が待機していた。オレは、横抱きに抱えていた和哉をカプセル型担架に横たえると、医療班に向かって深々と頭を下げる。

「和哉を……幼馴染を……よろしく願います!!!」

オレと結衣は、和哉を乗せたカプセル型担架を追いかけてようとしたが、スコットに行く手を阻まれてしまった。

「スコット！ どいてくれ！ 和哉のそばに居させてくれよ！」

「お願い！ お願いだから……」

スコットは神妙な面持ちで、首を横に振ると申し訳なさそうに言葉を紡いだ。

「君達には申し訳ないと思う、本当なら一緒に付き添わせてあげたいのだけど……君達のことを拘束するように、上から指示されている」

結衣は驚愕の表情を浮かべていた。きっとオレも同じような顔をしていると思う。

「なんで！？ なんで私達が捕まらなきゃいけないのよ!!」

スコットは苦虫を噛み潰したように苦しそうに顔を歪めると、少し俯きながら話し始めた。

「君達は、本来であればカゲヤマ少佐の私室で軟禁させられているはずだった。だけど、君達は脱走しAIによる妨害活動を行った。上の人間は、そう判断しているようだ……一部の人間は、用意周到なスパイだと思ってるみたいだし……今回、敵新型を回収したことで、そのパイロットについても君達の話の断片的に聞かせて貰った感じだと同じ世界の人間のようなだね？ おそらく上の人間は、同じように敵が送り込んだ妨害工作員に新型アサルト・コアとでも考え



ているんだろう……」

オレは、スコットの言葉に対して弁明できる余地が無いという考えに到っていた。自分達を不利に貶める物は、自分達とAIが実際に行ったことであり、ただの憶測に過ぎない物についても、容姿の特徴が一致している敵新型のパイロットという”資料”がある以上、自分達は違うと説明できる材料が無い。

隣で俯いていた結衣が絞り出すように声を出す。

「私達は……身を守るために敵を倒しただけなのに……」

「それは自分も理解しています。しかも、自分達はあなた達に助けられた。だから信用も出来ます……上の連中は自分達が納得出来る理由が欲しいだけなんですよ……あなた方の無実は、私とカゲヤマ少佐でなんとかしますから、今は……申し訳ありませんが指示に従って下さい」

オレは、スコットの言葉の中に誠実さを感じていた。ストーリーモードに出てくるスコットも、会話の内容は少なかったがどこか誠実さと真面目さ、あと熱さを感じさせるキャラクターだったと思う。

「ここはスコットとカゲヤマ少佐に任せよう……オレ達がAIと一緒に暴れたのは事実だ」

「……そう、ね。和哉をお願いします」

スコットは苦しそうに頷くと、近くの隊員を呼び出した。

「彼らをカゲヤマ少佐の私室に案内してやってくれ、くれぐれも丁寧に扱うんだ」

「え？ 独房で無くて良いのですか？」

「彼らは私達の命の恩人だぞ！ 本来、カゲヤマ少佐の私室でお待

ち頂く予定だったんだ。戻すことに支障は無い。もちろんセキュリティロックは掛けさせてもらうことになるが……」

スコットのこちらを伺うような視線にオレは頷いて答える。スコットが困る必要は無いのだ。彼はオレ達に良くしてくれている。

スコットから指示を受けた隊員達に連れられて、オレと結衣は力ゲヤマ少佐の私室に向かった。

深く重い海の底のような思考から浮上した俺は、一つの解答を得ていた。それは、心に負った傷を自ら隠す為に到った合理的な答えだと思ふ。自分の罪から逃げる為かもしれない。

あの時、どうすればベストだったのか、俺の中で答えは出た。けれど、それはとても困難なことだ。きっと、敵新型に乗っていたパイロットも俺と同じような経験を経てパイロットを極力殺さない戦い方に変わったのかもしれない……それは、もう確認する術を俺は持たないけれど、このことを生かせなければ、敵新型に乗っていた彼にも申し訳が立たないと思われた。

俺の出した答えは、敵のパイロットを殺さないように敵を無力化することだ。でも、それは自分一人がそれを貫くことが出来ても、味方全員に強要出来る内容じゃない……どうすれば、良いんだ……俺は意識の世界で自分の掌を想像した。俺の手で出来ること、俺だから出来ること……パイロットとしての能力自体はゲームセンターでも中の上程度。カゲヤマ少佐にも及ばない。そんな俺が、敵を殺さず、しかも自分も殺されず、そして味方にも殺させず、味方も殺されない。とてつもない理想と戦わなくてはならない。

意識が遠くなるような無理難題に頭痛がする気がした。

俺が出来る。俺だけの力……<三機神>……違う。たしかに俺の力だけど、その力で今回、敵を殺してしまった。俺じゃない誰かを

乗れるようにすれば、俺じゃない誰かでも替えが効いてしまう。そんなのは俺の力とは呼べない。どうすれば良い？ 敵を殺さない兵器。

そう、それしかない。

人を殺した俺は後戻りが出来ない。おそらく、敵の重装甲<sup>イエー</sup>高火力支援型にも人が乗っていた可能性がある。けど、これ以上幼馴染の二人に人殺しの十字架を背負わせない。背負わせたくない。その為に、俺は……！

瞼が重い……。口には酸素吸入用みたいな管が付いたマスクが取り付けられている。おでこにも電極みたいな物が貼り付けられている。なんだか、体温より少し高い温度の粘性を持った溶液の中に漂っているようだ。少し強引に瞼を開けると、自分が全裸で一人がやっと入れるようなカプセルの中、横たわっているのが分かった。

カプセル内に小さく”ピー、ピー”という電子音がしたかと思うとカプセル内の水溶液が徐々に減っていき、全ての液体が無くなると、心地良い温風が身体を乾かしていく、完全に身体が乾くと蓋がスライドして開けられる。

俺を除きこむように、水色の服に身を包んだツルツル頭の人が、こちらを見下ろしてきた。

「お目覚めですか？ 和哉くん、気分はどうです？」

「最高！ って訳には行かないですけど、問題無いです」

ツルツル頭の方は、その頭とは違い随分若いような感じが伝わってくる。おそらく三〇代前半、職業的かファッション的に頭をそり上げているのだと思った。

「和哉くんのお友達が、何度も様子を身に来ましたよ？」

「そうですね……俺はどれくらい眠ってたんですか？」

ツルツル頭の方は、少し考えるように顎を手で擦ると、思い出したように答えた。

「大体、二日とちよつとですね。いやあ毎日、この部屋で仕事してると日にちの感覚が無くなってしまつてね」

「二日ですか……敵の襲撃は？ 何度かあつたんですか？」

ツルツル頭の方は、再度考えるように顎を手で擦ると、今度はすぐに答えた。

「君が気を失つてからは一度も無いな」

「そうか……良かった……」

ツルツル頭の方は、ニコやかな笑顔を作ると、俺に制服と下着を渡してきた。

「いつまでも裸では寒いだろう。君が着ていた服はこちらで洗わせて貰ったよ。それを着たら、君の友達を呼んであげよう」

「ありがとうございます」

俺は渡された制服を着、近くに置いてあつたローファアを履いて、着替えをひと段落させる。視線をツルツル頭の人に向けると、カゲヤマ少佐が使っていたボールペンのような物でパソコンを出現させると、誠と結衣を呼びだしてくれていた。俺はツルツル頭の人に向きなおすと深々とお辞儀をする。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

「いや、何。これも私の仕事だからね。健康が一番だよ……そろそろ、友達が到着する頃だね」

ツルツル頭の人がいう通り、医務室と思われる部屋の扉が開くと、結衣と誠が泣きそうな顔をしながら立っていた。

「和哉！」「」

「誠、結衣、心配かけたね」

二人が俺に飛びつくように抱きついてくる。なんだか二人とも泣いてるみたいだ。

そんな二人を見てたら、俺の目にもいつの間にか涙が滲んでいた。

俺が気絶している二日間、間に色々なことがあったらしい。

まず、俺達三人の処遇についてだ。俺達はカゲヤマ少佐の私室で軟禁され、いかなる理由があろうと外に出ることは許可無しには出来ないはずだったらしい。それをＡＩによるハッキングで脱走、市街地や軍施設を混乱させたことは重罪に当たるといったことだった。しかし、カゲヤマ少佐とスコット少尉の弁明や、敵の侵略を阻止したという功績も踏まえて、アサルト・コア部隊に入隊することでこれらの罪を免除するということになった。

俺達は日本自衛軍に入隊することで、それぞれに階級が割り当てられ、基本的にアサルト・コアのパイロットは原則、【少尉】以上の階級という定めになっているらしく、それに従って俺達三人は少尉になった。あと、カゲヤマ少佐が戦線復帰まで時間が掛かることや、先の戦闘での陣頭指揮が評価されてスコット少尉は一つ階級が上がって中尉になった。

はつきり言って、階級を貰ってもピンとこない。もちろん、そういうアニメが好きだから知識としては分かっているつもりだ。二等兵から始まり、兵、尉、佐、将、元帥という具合に階級は上がって

いく。簡単に言うと、こんな高校一年生の俺達に年上の部下が出来たってことだ。しかも、誠から聞いた話、これまでアサルト・コア部隊に配属された最年少記録はスコット中尉が記録した一八歳だったらしく、それを二歳も更新した俺達は異例中の異例ということだった。もちろん、スコットは最年少中尉昇進記録新記録を樹立していたりする。

「オレ達、軍属になっちまったなあ……銃殺刑よりはマシだけどさ」

「また、戦場に出て戦わなきゃいけないのね……」

誠と結衣が落ち込みながら呟く。

そう、俺達は軍属になり、アサルト・コア部隊に配属されたということは、指示に従って敵と戦わなければならないということだ。それは、つまり先の戦闘のように戦い、相手を殺さなければならぬということだった。

でも、俺には一つの考えがある。

「俺さ、それでも良いと思ってる」

「「え？」」

誠と結衣が驚いたように目を見開く。

「また戦場で敵と戦うってことは、敵を殺すってことだぞ？」

「そうよ……私達は既に何人も殺してしまっているとは言っても、知ってやるのと知らずにやるのじゃ大違いよ？」

二人の不安そうな顔を正面で受け止めながら、俺は考えに考え抜いた自分なりの結論を口にした。

「俺達は誰も死なない！！　そして誰も死なせない！」

水色を基調とした病棟の廊下を進み、一つの病室の前で立ち止まる。

俺は二人を連れてカゲヤマ少佐の病室を訪ねていた。それは、着任の挨拶と一つの要望を提案する為だった。

病室の扉をノックすると、カゲヤマ少佐では無く、低くて少しハスキーがかった女性の声が返って来た。

「良いぞ」

扉を開け、深くお辞儀をすると『失礼します』と一声かけてから入室する。

そこには、カゲヤマ少佐が横になったベッドの脇に、ピンクの光で出来たパソコンのような物を開いたまま佇むアキラさんの姿があった。

「カゲヤマ少佐に、着任の挨拶に来ました」

「そうか……しかな、そう畏まらなくても大丈夫だぞ。この人は、そういうのは好かない。最初と同様に接すれば良い。私も同じように畏まらず接してくれて構わない、回りくどい言い方は好きじゃないんでね」

俺達はお互いに顔を見合わせると、苦笑いを浮かべつつも安堵した。

「それは助かるよ。あんまり敬語とか尊敬語とか謙譲語とか難しくて使い分けなんて出来ないからさ。お言葉に甘えて口調は砕けた物

にさせてもらいますね。最低限の敬語は使わせてもらいますけど」

アキラさんは、軽く頷いて答えた。心なしか口元が微笑んでいるように感じた。

俺は視線をベットに横たわるカゲヤマ少佐に向けた。  
すると、アキラさんが丁寧な答えてくれた。

「彼の怪我自体は大したこと無いようだ。ただ、ここのところスクランブル発進が連続していたからな。内臓に疲れが溜まっているということで、医者から退院を見送られてしまったね。怪我自体は左足の骨折で、全治一週間つてところだそうだ」

「骨折が一週間で治るんですか？」

誠が少し驚いたように質問した。

「キレイに折れていることもあるが、何よりこの医療設備は充実しているからな。手術で直接骨を繋げてしまうことも出来るが、今回のケースでは、そちらの方が逆に退院までの時間が掛かってしまうようだな」

誠が『はあ………すげえな………』と感想を漏らす。

アキラさんが、思い出したように質問してきた。

「そういえば、要望があるとか言っていたな。何だ？ 差支えが無ければ、私が代わりに聞いてやるぞ。それでも、それなりの権利は貰っているからな」

俺はアキラさんに話して良い物が少し考えたが、敵戦力に対する調査や、俺達がこちらの世界に呼ばれた原因の特定を行っているアキラさんなら、きつと関係があると判断して、話をしてみることに



した。

「実は……こちらの日本自衛軍で使用している機体の開発、整備を俺にやらせて貰いたいです！」

## 第6話 スクラッチ（前書き）

お気に入りに登録して頂いてる方々、お待たせしました。

## 第6話 スクラッチ

俺の申し出は、カゲヤマ少佐と一度話をしてから決めるという結論になり、今回は部屋に戻って休むことになった。

俺達には、カゲヤマ少佐の私室程広くはないが個室をあてがわれていて、シングルより少し大きいがセミダブル程では無いベッドが一つと、小さな机が一つ、スツールが三つある応接セットが付いていて、風呂桶は無いながらもシャワーが各部屋にあり、トイレが備えてある部屋だった。そのデザインは三人とも同一で、結衣の部屋だけ反転した間取りになっていた。

俺は誠と結衣に少し横になることを告げると、自分の部屋に入った。こんな未来のような進んだ世界にも関わらず、ベッドは未だにシートを使った物だった。ノリが効いているのかパリッとしたシートに身体をうつ伏せに投げ出すと、考えていた構想について、もう一度考察をする。

敵を殺さずに無力化する武器の開発。それは、とてもじゃないが簡単な事では無い。敵のアサルト・コアも、こちらと同様にコクピットは胴体部分にあることが確認されている。全ての機体が同一と決めつけるのは難しいが、概ね合っているだろう。

胴体を残して、敵を無力化する。それは達磨にするしかない。手足を破壊し、行動不能にするのだ、俺と誠、結衣ならそれも可能だと思う。だけど、それをこの日本自衛軍に強要することは難しい。それなら、搭乗する機体のプログラムに胴体攻撃への直撃を避けるよう組み込むしかない。でも、そのチューニングは兵士の生存率を大きく下げる要因になってしまう。敵を一撃で撃破出来たはずの攻撃はシステムに拒否され、敵は攻撃を受けても何度か反撃のチャンスがあるのだ。こちらの生存率も相手の生存率も一〇〇パーセントのまま、戦闘に勝利する方法を模索しなければならない。一応の方法はある。しかし、それには一機当たりのコストが高くなってしま

うのだ。あと、新たに組み込みたい思想の武器もある。そう考えていると、自分は開発向きの人間なんだと思い知らされたような気がした。

俺が思考の海に潜っていると、それを引き揚げるように部屋の扉がノックされた。

意識を浮上させた俺は身体を起こすと、ノックされた扉の前に立ちゆつくりと開ける。そこには、スコット中尉の姿があった。

「どうしたんです？ 中尉殿」

「中尉はやめて下さい。自分はまだ若く、実力もまだまだです。実力で言うなら貴方がた三人の方が上司でも変ではありませんから」

「んじゃーお互いに畏まらないってことで」

「はい」

「敬語やめようって」

「これは癖ですから、お気になさらず」

なんとなく傍から見ると俺が不敬に思われそうだけど、本人が気にしないってなら別に良いということにする。

「それで？ なんでわざわざ部屋まで？ 呼んでくれれば俺の方から行ったのに……」

「呼び付けるなんて上司面できませんよ。それに和哉さんは病み上がりですから気遣うのは当然です。要件と言うのは明日からの戦闘シミュレーションの打合せです。というか、私達にアサルト・コアでの戦闘訓練をつけて頂きたいのです」

「戦闘シミュレーションって、どうやってやるんだ？」

「それぞれコクピットに乗り込み、自分の機体の能力を数値化してシミュレータの上で動かせるようにします。コクピットのモニターは実戦のように動きますし、被弾の衝撃などはコクピットに付いて

いるスピーカで重低音を出し、空気を震わせることで少しでも臨場感を高めています」

スコットの説明を聞いていた俺は、内心驚愕していた。俺達がゲームセンターでプレイしていた物が、少しバージョンアップされているがこちらの世界ではシュミレータとして機能しているということだ。

そこで、俺は一つの疑問が湧いて来た。

「なあ……スコット、自分の機体のカスタマイズってどうやってやるんだ？」

「カスタマイズですか？ えっとですね……」

そう言つてスコットは腰に下げていたポーチのような物から仁天堂製の携帯ゲーム機に良く似たデバイスを取り出した。

「これには、アサルト・コアに関する各種機能を集約した物が入っています。敵の技術ですが、必要な部品等を自分が管理している異次元倉庫に保存しておく事で、それらを使って自分の機体をカスタマイズすることが可能です。仕組みは分からないんですが、このデバイスで設計した通りに自分の機体がカスタマイズされるみたいですね。ただ、コレを使いこなせる人間は日本自衛軍には居ません。カゲヤマ少佐がこの機能の解明に全力を尽くしていたようですが、自分の<バガン>を回収して<リガン>にするだけでも半年という月日を使い、なんとか形にしたと言っていました」

俺は、内ポケットからS A N Y製の携帯ゲーム機を取り出すと、電源を入れて中身を確認する。

考えてみたら、こちらの世界に来てからというもの、一度も真面目に電源を入れて中身の確認をしていなかったことを思い出した。

頭のどこかではゲームだと考えていても、行動がそれに伴っていない。しっかりとゲームの中だと思っていれば、まず最初に確認していそうなのが、今の今まで放置されていた現状に俺は苦笑いを浮かべるしか無かった。

OSが起動されて、オープニングムービーやローディングの画面をすっ飛ばし、いきなり自分のカスタマイズ画面になった。カスタマイズ画面の脇にあるメニューバーには、【戦闘開始】【ブリーフイング】【開発・整備】【動作確認】【コントロールパネル】【AI専用部屋】【異次元倉庫】【BBS】【オプション】が並び、【開発・整備】【動作確認】【AI専用部屋】【異次元倉庫】以外が灰色になっていて選択不可能になっていた。

俺は迷わず【異次元倉庫】を選択する。

すると、緑色のプログレスバーが現れて少しづつその足を延ばして行く。一〇〇パーセントになった時、俺の異次元倉庫の中身はゲームセンターで<三機神>を設計した後と同一の状態だった。

「スコット……」

「どうしたんですか？ 和哉さん、手が震えていますよ？」

そう、俺の手は今猛烈に感動し過ぎて手が震えている。クレジットの残高も結構残っている。材料も豊富だ。開発にはブレインとして参加するつもりだったけど、コレなら全部一人でやれる……！

「スコット……俺がお前を本物のエースにしてやんよ……」

次の日、俺達は戦闘訓練を行っていた。

講師は、誠と結衣に任せて俺は車いすに座ったカゲヤマ少佐と、それに付き添うアキラさん、スコットを連れだって日本自衛軍格納

庫内にある<バガン>の前に来ていた。

カゲヤマ少佐と事前に説明していた内容に、スコットとの話で分かった新事実を交えて内容の確認を行っている。

「……………つまり、和哉くんに開発と整備を依頼すれば、先の敵新型と同じようなスペックを持った機体の開発が出来るということだね？私の<リガン>もヤツら以上のスペックに出来ると？それで、試しにスコットの<バガン>をカスタマイズして、その開発能力を実際に見せてくれると言うことですね？」

「はい」

アキラさんが、眼鏡を中指で抑えると興味深いと言った印象を含んだ声色で自分の意見を話しだした。

「面白いな。確かに君達が駆る機体の性能は、敵味方を見ても頭一つ以上抜けている。これが量産できると言うのなら、心強い」

俺はスコットの<バガン>を見上げながら言葉を選んだ。

「俺達三人の機体は特別製です。なので、量産化は無理でしょう。俺の<三機神>に到っては通常の機体が有するパーツの三倍以上を使用しています」

「でも、少なくとも自分が乗る<バガン>の性能を和哉さん達が操る機体に近づけることが出来るということですよね？」

「腕は俺よりもスコットの方が上だからね。俺がイジツた機体で模擬戦なんてやったら俺が負けれると思う」

俺とスコットの会話を聞いていたカゲヤマ少佐とアキラさんは、何やらひそひそと話し合うと此方に向き直って大きく頷いた。

「まずは、スコットの＜バガン＞で様子を見させて貰いますか。他の機体に施すかはそれからです」

俺はカゲヤマ少佐の言葉に頷くと、早速作業に取り掛かった。

俺は先の戦闘でスコットの戦闘特性をモニターや実際に見たりして、ある程度把握している。

もともと＜バガン＞が汎用中距離特化型なので、どうしても近接戦闘に向かなかったが、スコットには汎用近距離特化型が向いていると思っ<sup>スカーミッシュ</sup>ている。汎用とは言いつつも、実際のチューニングとしては高機動近接特化型と＜アタッカー＞の中間のようなイメージになる<sup>アタッカー</sup>と思う。

俺は、アキラさんから貰ったボールペン型パソコンにあるUSBコネクタにスコットの仁天堂製の携帯ゲーム機に似たデバイスを接続すると、パソコンの画面にカスタマイズ画面を表示させる。未来なのにUSBコネクタという点に違和感を感じたが、仕様がアサルト・コアに準じているなら、きっとそういう物なんだろうと無理矢理納得した。

すでに俺の異次元倉庫から、スコットの異次元倉庫に必要な材料は受渡し済みだ。

俺は指の筋を伸ばしてから、身体全体でも伸びをすると、指を鳴らす。

「んじゃ〜始めますか!」

俺は前もって練っていた構想をデバイスを使って具現化していく。瞬く間に組みあげられていくロジックにカゲヤマ少佐とアキラさんは呆れ顔だ。

運動ルーチンを最適化、慣性除去装置の出力は機動力を変数に設定して自動化、AI学習能力を俺の＜イザナギ＞からの流用で組み上げていく。



三時間程そうしていただろうか、とりあえず概要の設計が終わり、後はパイロットとの微調整作業を残すだけとなった。

俺が設計したスコットの機体が、少し大きめに開いたパソコンの画面上でアオリやフカンのアングルに切り替わりながらクルクルと回っている。その姿は、西洋の甲冑をイメージした翠の機体で、頭部や肩はドラゴンをモチーフにしたデザインをしている。頭部の後方からポニーテールのように垂れる金色の糸のような物は、排熱対策で取りつけた物だ。主兵装として右手に大型ランス、左腕に小さな五角形の盾を持っている。背中からは膝裏まで表が黒で裏が赤地のマントが伸びている。メニューの中から【反映】のボタンを選択すると、スコットのくバガン>が光に包まれて、パソコンの上でクルクルと回っていた機体に形を変えた。

「ああ……くたびれた……とりあえずスコット、これシュミレータで動かしてみてよ。基本に忠実、だけど結構じゃじゃ馬な設定になったから、慣れない内は振り回されると思うよ」

三時間で組み上がった自分の機体を見上げて、端正な顔に似合わない程、口をあんぐりと開けて呆けていたスコットが、ハッと我に帰る。

「分かりました！ 早速試してみます！」

パソコンから携帯ゲーム機のようなデバイスを外してスコットに返すと、格納庫内にある大型モニターをスコットのシュミレート画像に切り替えて貰う、戦闘訓練を行っていた面々も興味があるのか視線を奪われている。

シュミレータで選択されたエリアは、青空がどこまでも広がり、草一本生えていない荒野にスコットの新しい機体が佇んでいた。

倉庫の大型モニター隅にワイプが開き、スコットの顔が映し出さ

れる。

「それでは、和哉さん。さっそく行きます」

「おう、気を付けてな」

シュミレータで気を付けるも無いのだが、出来の良い3D映像という物は衝撃が凄いと酔ってしまう物だ。あながち間違ってもいないだろう。

スコットの機体がゆっくりと歩き出す。その動きの滑らかさに、周囲の隊員達も「おお」と感嘆の声を上げる。

「凄いです。全然動きだしの慣性を感じませんでした。＜バガン＞とは比べ物になりません！」

「スコット、その発言は少し早いかな。歩くだけじゃなくて、走ったり飛んだりしてみなよ」

「言われなくても！……行きます！」

翠のドラゴンをモチーフにした西洋甲冑のアサルト・コアが全力で走りだす。滑らかな歩きだしとは違い地面を蹴るその足はしなやかに動きながらも、力強さが伝わってくる。あっという間に最高速に達した速度は＜バガン＞の走行速度の約一・八倍だ。そして、スコットは急停止を掛ける。走った時とは対照的に、地面を挟くこともなくピタリと停止する。

「今、音速の半分にも届く速度で走っていたのに、急停止しても何も感じませんでした。コレなら全力で動き回っても身体に負担が掛からないですね！」

「俺の設定では空中適正がバガンよりも大分良くなっているから、空中の動きは陸上よりも良くなってるぞ。飛んでみるよ」

「行きます！」

スコットの機体が深く沈みこむように、しゃがみ込んだかと思うと、伸びあがるように空へと飛び出す。光る粒を撒き散らしながらマントを風になびかせて空を舞う姿は、本物のドラゴンを思わせる幻想的な映像だった。

「通り、飛びまわって満足したのか、右手に持った主兵装を構え直すスコット。」

「和哉さん、コレはもう使えますか？」

「まだ出力測定してないから、適当な威力だけだな。その武器は、中近距離両用の武器だ。中距離で敵に先端を向けて、トリガーを引けば三六ミリの砲弾が一回で六発発射される。どれも徹甲榴弾になっているから、当たれば大ダメージ確定だ。だけど、発射する方向がバラバラだから牽制程度にしか使えないけどな。その武器の真骨頂は、見た目の通り、近接戦闘にある。しかも刺突だな。その機体が、それだけの運動性能をもっている要因の一番の理由だ。重火力による一撃離脱。それが、その機体のコンセプトになっている」

「アキラさん！ お手数ですが、ダミーの設置お願いします！」

スコットの依頼でアキラさんが訓練用ダミー機体をシュミレーターエリア内に一機出現させる。先の戦闘で得た<イエーガー>のデータコピー機体だ。

ダミーはスコットの機体から大分離れた場所に現れた。遠距離武器の持ち味が生かせる絶好の距離感である。アキラさんも中々良い性格をしてるなあ。

スコットの機体目掛けて得意の遠距離攻撃をしかけてくるダミー。クラスター爆弾の雨霰。あめあられ。その中を翠のドラゴンは疾走し、一気にダミーとの距離を詰めると、右手に携えた大型ランスをダミーの身体に突き立てていた。

「凄い！ あの装甲が厚いくイーガー>をダミーとは言え一撃！  
！」

「俺の設計だと、そこまでやったらやりすぎなんだけど……」

俺の発言が引がかかったのか、隣でモニターを食い入るように見ていたカゲヤマ少佐が疑問の声を上げる。

「敵を倒すのに高威力の武器では何がダメなのですか？」

やってしまった……。まあ、勝手に全てを終わらせてから事後報告するわけにもいかない。俺は少し言葉を詰まらせるが、即座に観念して全てを話すことにした。

「それはですね……俺は敵と殺し合いをしたくないんですよ」

カゲヤマ少佐は余りのことに言葉を失い、その隣にいたアキラさんまでが驚愕の表情を浮かべゆくりと口を開いた。

「それはどういうことだ？ 敵を殺さずに戦うということか？ それがどれだけのハンデを背負って戦うことになるか、知らんわけではあるまい！」

「何も敵を殺さなくても、相手を無力化することは出来ます。先の戦闘で戦った、敵新型はカゲヤマ少佐の<リガン>に敵えて止めを差していません。つまり、敵の中にはこちらの日本自衛軍を出来るだけ殺さずに済ませたいと考えている者がいるということです」

「だが、全ての敵が”そう”という訳ではあるまい。現に敵の<イーガー>部隊は基地に対して攻撃をしに来ている。非戦闘員が数名、実際に命を落としているのだぞ！」

先の戦闘で死人が出たことをアキラさんの言葉で初めて知り、俺

は言葉を失った。でも、こればかりは俺も引くことは出来ない。

「アサルト・コア部隊に死人なんて出させませんよ！ その為に俺が開発するんです！ 敵の攻撃を受けているだけではジリ貧です。いつかは、こちらから打って出なければならぬ！ でも、人は殺したくないんですよ！」

「和哉が言っていることは理想論だ！ とても現実的とは思えない！」

「俺は成し遂げてみせますよ！ 夢でも幻でも無く現実の結果にしてみせると言ってるんです！ 見ていて下さい！」

俺は再度デバイスを手に取ると、最後の調整を施していく。先のテストは機体の追従性をテストする為の物であり、これから行うテストは実戦に基づいた検証だ。

組み上げたAⅠと、これから各機体に標準装備として持たせる予定の新装備をスコット機へと装着させる。

シュミレータ内と格納庫内にあるスコットの機体が光に包まれる。そして光が収まった時、スコットの機体には見た目上の変化は現れなかった。それを見た一般の隊員から『何も変わってねぇじゃん』と呟いた声が聞こえる。

「アキラさん、これから俺がシュミレータ上で証明してみせます。先ほどのダミー<イエーガー>を二〇機出現させて下さい。あと、お台場に現れた汎用中距離特化型の劣化版を三〇機です」

俺のリクエストに言葉を失うカゲヤマ少佐とアキラさん、コクピット内にいるスコットもモニター画像内で目を見開いている。

「いくらなんでも、それは無理があるんじゃない……」

スコットが恐る恐ると言つた雰囲気です否定の言葉を放つ。それに對して俺が返した答えは周囲を沈黙させることに十分すぎるインパクトを備えていた。

「それくらい居ないと、スコットに攻撃当たらないだろ？」

あんまりな言葉にスコットは目玉が転がり落ちてしまふのでは無いかと言う程に目を見開き、カゲヤマ少佐とアキラさんに到っては、むしろ呆れていた。

アキラさんが溜め息混じりに言葉を紡ぐ。

「耐久実験なら、敵を一機出せば済むだろう。避けずに着弾させれば良いのだから……そんな数の敵から集中攻撃されたら消し炭しか残らんぞ普通」

アキラさんの言葉に俺は不敵な笑みを浮かべる。幼馴染が二歩下がるのを感じたが、今は俺の完全完璧なスルースキルによって傷ついた心は無視することにした。

「やってみれば分かりますよ」

「……スコットがシュミレータ酔いしても知らんからな」

「ちよっ！ アキラ技術主任！？」

そっか……アキラさんは技術主任だったのか、カゲヤマ少佐の美人秘書という訳では無かったのか……と、俺が考えを改めている横で、シュミレータにダミーの敵を出現させて行く、アキラさん……もといアキラ技術主任。

シュミレータ上は全部で五〇機のダミーがスコットの機体を取り囲み、しっかりと有効射程を考慮した配置になっている。やはり、アキラ技術主任は良い性格をしていると思う。俺は出現したダミーを

確認すると、アキラ技術主任に頷いて答えた。

「スコット聞いてくれ、これは実際の戦闘を想定した実験になる。敵の攻撃を回避しつつ、敵を無力化してくれ、攻撃対象の胴体を攻撃せず、敵の頭、腕、足、兵装を攻撃してパイロットを殺さずに終了させてくれ、健闘を祈る！」

「ちよっ！ 和哉さん！？」

俺は問答無用で、シュミレータを開始させる。すると、一斉にシュミレータの空を埋め尽くす嵐のようなミサイルの雨がスコットの乗った機体を襲いだした。

「こんなの連続で喰らってたら、体感振動の所為で本当に酔っちゃいますよ！」

丁寧な言葉で悪態をつきつつも、それらミサイルの雨の中を踊るように回避していくスコット。それを見ていた他の隊員達は感嘆の声を上げ、ただ運動性能に物を言わせて攻撃を回避しているだけでは無いか、と拍子抜けした様子のアキラ技術主任の姿があった。

スコットは良く機体を操っていると思う。考えてもみると、かなりの無茶が行われている。俺が森を全速力でダッシュした時に、枝にもぶつからずに走り切れるかという、絶対無理だと言えるだろう。しかも自分に向かって飛んでくるそれらを避けながら、前進して敵部隊への距離を縮めているのだ。スコットのパイロット能力の高さには舌を巻く物がある。しかし、そのまま全て交わし切り敵の前線であるスカーミッシュ部隊に届くというのは無理な話だ。距離も残り少しいところで、スコットの機体にスカーミッシュが放つ中距離射撃が当たり始めた。

「やはりな、あれほど敵の数がいって集中攻撃されれば、如何に運動いか

性が優れていてパイロットの腕が良かろうと、いつかは捕まる。和哉の夢は夢のままで終わってしまいそうだな……」

アキラ技術主任の言葉には、少し期待を裏切られたような色があった。

「まだ実験は終わっていませんよ？　ここまで避けたのは、俺も予想外でした。ここからが、先ほど装着させた新装備を見て頂くところです。スコット機の状態をよく観察してみてください」  
「なに？」

スコット機を食い入るように見始めるアキラ技術主任、その脇で何かに気付いたのかカゲヤマ少佐が『あっ』と声を漏らす。

俺は再度、不敵な笑みを浮かべた。

「気付きましたか？」

「ええ……信じられないことですがね……」

カゲヤマ少佐は自分でも信じられないと言った様子のまま、おもむろに口を開いた。

「スコット機のステータスバーに大きな損傷が見受けられません……」

……

「そんな馬鹿な……！」

アキラ技術主任が『信じられない』と声を上げながら、ステータスバーの増減に視線を奪われたかと思うと、シュミレータにエラーが発生していないか調査を始める。

その様子を数秒見つめてから、俺はアキラ技術主任に確認を取った。



「どうですか？」

「……エラーは、無い」

もはやモニターの中心では空中で爆心地と化しているスコット機。その様子を信じられないといった様子のまま格納庫内にいる人間が視線を向けていると、モニター右上にワイプ画像が開き、スコットが顔を覗かせた。

「あのーみるみるエネルギーゲージが減少して行くんですけど……」  
「いまから説明するから、なぜスコット機にダメージが与えられないのか？ それは俺が新しく構想した慣性除去装置イナーシャル・リムーバ・デバイスに理由があります」

「どういうことだ？ 慣性除去装置には、外部からの攻撃に対する効果は無かったはずだ」

アキラ技術主任が困惑した表情のまま、俺に質問をぶつけてきた。

「それは……慣性除去装置の特性から説明をする必要がありますね。慣性の法則というのは、物体が現在の状況を可能な限り維持するという世界に設定された不変の法則によって起こります。慣性除去装置は特定の範囲に発生させたフィールド圧力によってベクトル屈折を起こし、フィールド周辺に発生した慣性を別方向に受け流すことで慣性の除去を実現しています。除去とは名ばかりの慣性屈折装置というのが正式名称でも良さそうな物ですが」

「そのくらいは理解している。それがなぜ、敵攻撃を無効化するようなことになる？」

「つまりですね。チヨバムアーマー爆発反応材質という特殊装甲がこの世界には有ったはずですが、その応用と考えると貰えれば良いかと思います。今回開発した指向性慣性除去装置ダイレクト・イナーシャル・リムーバ・デバイスとでも名付けましょうか、これは…

…発生した慣性の方向をただ逸らすのでは無く、慣性が発生した方向に向かってベクトルの向きを変えさせる機能を持たせました。つまり自らの攻撃力によって相殺されてしまう機能ってことですね。もちろん、大きな攻撃等でこちらが精製したフィールドの反発力を上回る物で攻撃されれば、逸らすことも出来ずにダメージを受けてしまいます。それに慣性その物を相殺出来ても、熱量自体を無かったことに出来るわけではありません。だから実態弾にこそ有効な装備ですが、レーザーや荷電粒子砲のような高熱源体を発射するような攻撃には弱いという特性があります。それに、この装置は大きくエネルギーを消費してしまうという特性があるんで、被弾率の高い機体の場合はパワーダウンの原因になってしまいます」

俺の説明を黙って聞いていたアキラ技術主任が、俺の説明に存在したデメリットについて、独自の見解を主張した。

「しかし、被弾による負傷、及び死亡者の数は大きくその数を減らすことが出来るだろうな……今まで実現不可能と言われていたバリア機能の装備、その有効性についてはアサルト・コアのみならず、拠点防衛にも大きな意味を持つことになるだろう……これは……凄い……」

モニターの中心で爆心地と化していたスコットが少し振動酔いを起こしたのか青い顔をしながら、俺達に声を掛けてきた。

「つまり、攻撃を受け過ぎると、このバリアもダメだってことですか？」

「おうけうだ。スコット、攻撃を再開してくれ。もう一つの要素についての説明開始だ」

俺の了承を得たスコットの竜騎士は、飛びあがって敵の弾幕から

一時的に逃れると、一気にスカーミッシュ部隊に接近する。スコットは勢いそのままに敵の一機に攻撃を仕掛ける。

すると、敵の胴体を狙ったはずの攻撃は、その軌跡を自ら逸らし敵の主兵装を持つ右腕を切り落し、左手に装着された盾で敵の頭部を殴り潰していた。

「今のは!？」

「その機体に搭載したAIがやったんだ。敵のウィークポイントを調査し、それを自動的に回避すると同時に、相手の戦闘行動を不可能にするための最善解を導き、それに誘導する。それなら、敵を無力化しつつも殺さずに済む」

カゲヤマ少佐とアキラ技術主任が生唾を飲み込む音が聞こえる。

「あ……忘れてた」

俺の言葉に全員の注目が集まるのを感じる。

「そのAIの名前はホーリー君。俺の地元で活躍しているサッカーチームのマスコットキャラクターだ。仲良くしてやってくれ」

スコットの顔が映るワイプの下にユニフォームを着た緑色の竜をモチーフにしたAIがビジュアル化する。

『スコット宜しくな! これから一緒に頑張っぺよ!』

なんとも言えない空気が格納庫に満ちるのだった。

## 第7話 アドミニストレーター（前書き）

今回は文字数少なめです。

## 第7話 アドミニストレーター

スコットの機体を組み上げた後、俺は忙しい時間を過ごしていた。スコットについては実戦を見ていた為、適正に合った機体を用意することができたけど、他のパイロットについては全くと言って良いほど情報を持っていなかった。まずは全パイロットの能力や性格を元に適性を調査し、開発プランを立てる必要があったのだ。あとカスタマイズ画面の使用方法をアキラ技術主任を通じて教育を施すことで、各パイロットに合わせた微調整を他の人でも行えるようにしなければ、俺一人だとパンクしてしまう懸念があった。

俺は、適正確認用にシュミレーターで使用する機体の作成に当たった。モデルにしたのは<三機神>で、それぞれ三形態の特性に合わせた劣化版を作成することにした。全ての能力は<三機神>に遠く及ばないが、顕著に表れるクセの強い設計思想はパイロットの適正を図る上で実に効率が良いと思えたからだ。<三機神・スサノオ>のマイナーチェンジ版として作成した汎用近距離特化型の<アルス>、<三機神・アマテラス>から重装甲高火力支援型<ソル>、<三機神・ツクヨミ>から高機動近接特化型の<スイゲツ>を作成した。これらの機体は基本的に兵達に配る機体のベースとして使用する予定の物だ。これらを各パイロットに調整した物に変更していく。それぞれにAIも作成してやる必要がある。すでにネーミングセンスの限界を感じていた俺は<アルス>に適用するAIとして<カツ>、<ソル>には<レツ>、<スイゲツ>にはまさかの<キツカ>と名付ける程、ネーミングごときに時間を掛けてやる暇は無かった。このことを知らない結衣や兵士達はなんとも思わなかったようにだけど、誠はニヤニヤとヤラシイ笑みを浮かべていた。

もちろん、開発中に敵の襲撃が無かった訳ではない。俺が目覚めてからすでに一週間、合計五回の襲撃を受けている。でも、すでに

開発を完了していたスコットの機体<ホーリーホック>が散発的に攻撃を仕掛けてくる敵を殆ど一機で仕留めていた。このレベルアップ具合には、予想していたとは言え圧巻の一言だ。例えるならば、ゲームによくある二周目プレイの『強くてニューゲーム』みたいな出てくる敵の機体は、本来であればこちらの機体より少しだけ強い機体なんだろうけど、出てくるのは圧倒的な完全力スタマイズのプレイヤー機体。ゴブリンをエクスカリバーで狩るかのような物だ。そのお陰で、俺達三人は開発や兵士の訓練に集中することが出来ていた。更に俺が開発した非殺傷攻撃演算装置ノシリーサル・アタック・デバイスの効果は思わぬところに効果を表していた。敵パイロットを殺さず捕獲すること、敵が使用しているデバイスに格納された機体の部品や機体その物を鹵獲ろかくすることが出来るので、機体の拡充や開発資源の獲得に大きな影響を与えていたのだ。

兵士のデータについては収集が済み、技術班とパイロットでチームを組ませてお互いに機体の調整に励んでいる。誠と結衣、俺からお墨付きを貰ったスコットによって行われている操縦技術の教育も順調に進み、実戦形式の教育は調整された機体のテスト運用も兼ねていた為、どの兵士も死に物狂いだ。

俺が目覚めてから一週間ということは、カゲヤマ少佐の骨折完治と同義だ。本来であればリハビリも必要なところだけど、目の前でメキメキと実力を付けていくスコットや兵士たちを見ていたカゲヤマ少佐は、もはや我慢の限界と言わんばかりに、すぐさま格納庫に顔を出していた。後で聞いた噂によると、医務室でツルツル頭の医師から『完治』の報告を受けるや否や、松葉杖を放り投げて駆け足で格納庫に走ってきたそうだ。ゆったりとした作りの病人服からチラチラと肌を見せながら走るカゲヤマ少佐は、走るバラ製造マシンの如く、男女問わず背景にバラを咲かせていたという噂だ。本人は意識しているのか意識していないのか、なんとも迷惑な話である。

「ハア……ハア……わ、私にも、和哉さん特製機体を作って……作

つて下さい……っこの通り、完治しましたっから！」

本当に意識してやってるんだとしら迷惑な話である。俺は断じて普通だ。ちゃんと女子が好きな男子である。しかし何故だろう、汗で頬に張り付く髪の毛、淫らにも着崩れてキレイな右肩を露出させるのかと思いきやギリギリ汗で肩に留まる病人服。それらを見ていて、若干顔が赤くなってしまうている気がする。この人はダメな人だ。関わっちゃいけない人なんだ。

少し離れたところの機体の陰から頬を赤らめて何かを期待した眼差しを向けてくる結衣を見つけて冷静に戻れた。結衣……グッジョブ。そして、俺は普通だ。そんな期待されても困る。

「カゲヤマ少佐、落ち着いて下さい。とりあえず自室に戻って着替えて来て下さい。ちゃんと作りますから」

「ホントですか！？ 嘘じゃないですよね！？」

身を乗り出す様にして上目遣いで見上げてくるキレイな顔……この人、絶対狙ってやってると思う。つか、誰だ。この人を少佐なんて地位に置いた奴は……困るじゃないか！！！！

「嘘じゃないです。ちゃんと少佐としてキチンとした格好をして来て下さい。でないと機体組んであげませんからね」

「分かりました！ すぐに着替えて来ます！ 待ってて下さいね！」

可愛い人だ……さっきよりも近い距離で顔を半分隠しながらキラキラとした眼差しを向けて来ている結衣を見つけて、ハッと正気に戻る俺。あの人は……カゲヤマ少佐は、生きていてはイケナイ人間なんだ！……じゃない、あの人は深く関わっちゃいけない人だ。

カゲヤマ少佐用に組んだ機体は、赤い甲冑から鹿を思わせる角が生えた汎用<sup>シエネラル</sup>万能型隊長機の<アントラーズ>だ。スコットの<ホーリーホック>は将棋に例えるなら高い機動性と高い攻撃力、汎用性を兼ね備えた『飛車』だ。誠の<ラグナロク>は、多角的な攻撃支援と射撃性能を持つ『角』。結衣の<ブラックキャット>は、速攻性能と手数ของ多さは『香車と成香』を思わせる。対して、カゲヤマ少佐の<アントラーズ>は『金将』他の機体のように特化した物は無いが、どのような局面でも一定の力を発揮するタイプの機体だ。これは器用貧乏にも思えるスペックだが、その本質は生存確率の向上と通信能力の強化を施すことにある。本来、現場の指揮官は誰よりも死ぬことは許されない、それにも関わらず前線で指揮を執る必要がある。それらを両立させるには、生存確率の向上の為に局面に左右されない安定した力と、高い通信制御能力が必要となるのだ。

俺が考えに考え抜いた渾身の機体をカゲヤマ少佐は、あまり気に入らなかった様だ。

「私もスコットのように、ズバツと動いて敵陣を切り裂き、舞うように敵中深くで戦う機体を想像していたのですが……」

「少佐が怪我をした戦闘もそうですが、勇猛果敢に敵と相對するのは指揮官がすることではありません。昔の物語に出てくるような武将が戦うことは、本来では有り得ないですよ。指揮官の死は、それ即ち戦闘の敗北を意味していると言えます。現に、少佐が戦線を離脱した後、スコットが指揮を代行するまで戦線は乱れ切っていました。防衛線だからこそ撤退はありませんでしたが、こちらが攻めていた場合は、その時点で撤退している状態です。先の戦闘では、少佐が唯一敵新型と戦える機体だったので止むを得ない状態でしたが、これからはそういう訳には行きません。指揮官は指揮官らしく、後方で全員が生きて帰る為に知恵を絞って頂きます」

「そうですね……言っていることは分かりますけど、やはり悔しい



物ですね……スコットは私がまだ中尉だった頃に指導した訓練兵だというのに、AC操縦の技術では今は勝てそうにありませんからね……」

「カゲヤマ少佐の指導が良かったからこそ、スコットも今ではエースとして活躍出来るのだと思います」

「そうですね……そうかもしれませんが。老兵は前線を離れて、指揮を執ることにしましょう」

俺はカゲヤマ少佐の言葉に思わず笑みを浮かべた。機体を見上げていたカゲヤマ少佐は機体の左腕を見て視線を止めていた。

「和哉さん。ちょっと質問なんですが……機体の左上腕部にある黄色い帯は何でしょうか……やけに目立つのですけど……」

「あゝ……あれは……」

俺が忘れていたとばかりに間を持たせると、カゲヤマ少佐は機体から目を離して俺の方を見た。その瞳の色には『まさか……』と言った物が見えたような気がした。

「キャプテンマークです」

俺は期待を裏切らない男だ。

カゲヤマ少佐の機体が完成したことで、日本自衛軍の機体は全て揃ったことになる。それは同時に、今まで防戦一方だったこの戦争で、初めて攻勢に出る準備が出来たことを意味していた。

基地内にある大会議室にACパイロットを全員集めたカゲヤマ少佐は、反攻作戦について会議を始めた。

「我々日本自衛軍は、大谷 和哉少尉、光石 誠少尉、杉咲 結衣少尉、彼らの協力により以前では考えられない程、強力な戦力が拡充された。すでに数度に渡る敵の攻撃をスコット中尉一機による迎撃で打ち倒せたことは諸君らもすでに聞き及んでいると思う。今まで、敵のACから得た技術で製造された汎用中距離特化型<バガン>では、考えられない戦果だ。そのスコットが操る機体を開発した和哉少尉が手掛けた機体をつい先日、我々横須賀基地所属ACパイロット全員分を揃えることが完了した。各パイロット、技術者の育成も誠少尉、結衣少尉、アキラ技術主任の協力によつて成された。機は熟した……我々は敵に対し、一代反攻作戦を決行する！」

大会議室内に歓喜とも怒号ともつかない、大きな声援にも似た声が響き渡る。それは、今まで耐え抜いてきた横須賀基地の……いや、日本の皆が待ちに待ったことだからかもしれない。俺達のような、ただの高校生が戦争に手を出し、自分達の世界じゃないとはいえ自分達が知る世界を救うための力になれることは、嬉しいことだと感じていた。

「捕虜の尋問による結果。敵主力部隊は現在、栃木県日光市を中心に拠点を展開している。日本自衛軍の他基地が陽動作戦を決行。敵主力の目がそちらに移っている間に、こちらから拠点を打つ！作戦決行は今から二一時間後！各員、十分な休息を取って準備に入れ！各員の健闘を祈る！解散！！」

カゲヤマ少佐の言葉を最後に大会議室内にいた全員が即座に自らに必要な行動を開始した。居住区に居る家族に挨拶に行く者。自らの機体を最終チェックに行く者。遺書を書く者。俺は、何をしたら良いか分らず、そのまま席に座っていた。すると幼馴染二人が俺の席の近くにやってきた。

二人とも雰囲気が悪い。防衛戦では無く、こちらから攻勢に出ることに、やはり不安があるのだろう。

「なんだか大変なことになっちゃったな……オレたちが戦争やってんだぜ？ 考えらんねえよな……」

「私達も今回の作戦にはパイロットとして参加しなくちゃいけないんだよね……」

「……そうだな、軍属だからな。でもさ、考えてみるよ。俺達がこの世界に来た理由だと思われる『次元砲』ってのはさ、敵が持つてるんだろ？ それを奪って解析すれば、自分の世界に帰れるかもしれないんだ」

俺の言葉は二人に少くない目的意識を持たせることに成功したようだ。先ほどのような意気消沈した雰囲気が一気に明るくなったことを感じた。

「そっか！ それさえあれば、私達家に帰れるかもしれないんだ！」

「そうだな！ 少なくともオレ達をここに呼んだ奴らを後悔させてやらないと気が済まないしな！」

「ああ！ 俺達は誰も欠けること無く元の世界に帰るんだ！」

すでに戦闘開始から二時間が経過していた。俺達がいる横須賀基地の機体は、俺が手を加えた特製品だ。しかし、陽動を掛けている他の基地の部隊は、その殆どがくりガン>とくバガン>による構成だった。

主な戦場となっている栃木県小山市上空を移動する俺達を乗せたAC運搬用飛行機は黒煙なのか雲なのか分からない中を音も立てずに飛行していた。地上では陽動の部隊が戦闘を繰り広げている爆音

が響いてくる。雲の切れ目からたまに見える戦場は、目を覆いたくなるような惨劇が広がっていた。その光景は、最初この世界に俺達が現れた時のお台場の比では無かった。

俺の視線の先で、震える指を抑える為に白く冷たくなった手をグツと強く握りしめている結衣の姿がある。

「こんな……小さい頃に何度も小山遊園地に来た事あるのに……知ってる町が炎と煙で全然分らない町になっちゃった……許せ無い……」

思いつめている結衣とは裏腹に、誠は普段の飄々とした態度は変わっていない。まるで、遠足にでも行くような雰囲気を周囲に振りまいている。

「飛行機なんてさあ、オレ初めてなんだよね！ 慣性除去装置のせいで、全然離陸の感動とか味わえなかったけどさあ、てかさ！ このパイロットスーツって着心地こんな良かったのな！ こんな良いんなら普段の訓練の時も着とけば良かったぜえ、マジ損した気分。サツサと敵倒してさ、元の世界戻って、好野家の牛井でメガ盛り食いたいね！ つゆだくだで！」

いや……このハシヤギ様はむしろ不自然だ。誠は基本的に空気が読める人だ。それでも、今こんなにハシヤイでいるのは結衣を元気づける為というよりも、場の空気に自分が押し潰されないようにテンションを上げているように感じる。

作戦の指示をする為に俺達の部隊の隊長であるデュネス大尉が、パイロットの待機室に現れた。

「光石少尉、ウルサイぞ！ これから作戦の説明に入る。姿勢を正してしっかり聞け！」

デュネス大尉に叱られてビシッと姿勢を正す誠、なんとなく笑いが込み上げてきたけど噛み殺す。

「これから一〇分後、この和哉を中心とした部隊は宇都宮上空で機から機体をパージする。すでに戦場は陽動部隊によって現在の小山と真岡と佐野に移っている為、敵の部隊が殆どで払っているはずだ。お前達は残存兵力を掃討しつつ進軍し、日光に存在する敵拠点を制圧しろ。拠点制圧部隊には、和哉率いるAC三機と、スコット率いるAC八機、アレフ率いるAC一〇機、カゲヤマ少佐が率いるAC一二機が当たることになる。各員の健闘を祈る！ 機体に入り込み待機しろ！」

俺達は、お互いに顔を見合わせ頷きあうとそれぞれの機体に入りこんで出撃の時を待つことにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7935u/>

---

疾風機兵アサルト・コア

2011年12月19日17時51分発行